

古代メソポタミアにおける市場，国家，貨幣

商人的經濟再考

明 石 茂 生

1. はじめに

K. ポランニーによれば，古代メソポタミア（バビロニア，アッシリアなど灌漑帝国）は，市場が不在であり，等価性が先決された再分配形態が支配的な古代社会であった。再分配様式が支配的な経済の下では，利益抜き取引と，リスクなしの処分での取引を実現させる体制が整っていた。部族社会から古代（アルカイック）社会に移行する際に，バビロニア灌漑帝国において出現した非市場的制度は，小農経済の中で制限付きの市場を利用したギリシャのアゴラなどと対比されるものであった。すなわち，その再分配システムでは，交換の領域を含め，あらゆる対象物となる財が等価性をもつように先決され，それはまた市場がもたらす価格変動や不正な利益追求の取引を排除する社会的工夫でもあった¹⁾。

しかし，このような等価性を前提として市場の不在を主張するポランニーの考えは，第一に彼特有の市場のとらえ方に負っていたことに気づかざるをえない。彼によれば，市場はまず交換の場所であるが，それ以上に需要と供給に対応する価格決定メカニズムを意味していた²⁾。経済学では自由競争市場の表現としてなじみ深い，この定義から市場は価格変動を引き起こすがゆえに古代社会では否定的な態度がとられ，また交易，貨幣とは別の論理と歴史をもって市場は出現したのであり，他に比べ目新しいものであったという主張に結びついていた。

1) Polanyi (1977 : 訳 120-28, 148-50)

2) Polanyi (1977 : 訳 229)

第二に、ポランニーの考えは彼が1964年に死去するまでの古代メソポタミア研究の成果に多分に負っていたという事実である³⁾。彼はそれまでの遺跡調査や粘土板解読による研究成果に影響を受けて彼独自の考えをまとめていったと考えられる。しかし、その後の数多くの遺跡調査や粘土板等の文献資料の蓄積、解読、研究の進展、ならびにシュメール語、アッカド語の語彙の収集、辞書の編纂などの成果は、それまでの見解を大きく変えるほどに充実したものになっている。ポランニーの市場不在の互酬・再分配様式を社会的統合の主形態とする見解は、古代メソポタミア研究者からは疑念がもたれてきているのである⁴⁾。もちろん、他方では一部のアッシリア学研究者によりポランニーの見解は尊重され続けており⁵⁾、市場がどの程度の位置を占めるかに関しては論争が続いているのが実情である。

この点で確かに決着がつかないものがあるのであるが、それでも次のような疑問がわき続けていることは否定できない。ポランニーの第一の定義に即した形で、市場を交換の場ないしは(場所、需要者、供給者、慣習、法、等価性など)市場諸要素の連合体として緩やかに定義した場合、市場は古代メソポタミアにおいていち早く登場したのではないか、という疑問である。市場が生成する要因として、ポランニーは対外的な要因と対内的要因をとりあげていた。メソポタミアは対外交易を構造的に促す地理的環境にあり、交易と特化という誘因がメソポタミアに都市文明を興隆させたという考えがあり、この点から群生して出現していた都市または都市国家は交換の場を数多く形成させていたと考えることができる⁶⁾。実際、メソポタミア都市には市場の場所が不在なのではなく、郊外にある交易港・商館(karum)だけでなく、城門や通り、倉庫付近においても売買がおこなわれていたと推測されている⁷⁾。

このような環境の中で、先決された等価体系の下で機能する再分配システムだけが優位になって社会の支配的形態となったのであろうか⁸⁾。対外交易が不

3) Veenhof (1972: 349-50)

4) Veenho (1972: 348-57), Silver (1995: 95-176), Powell (1999), Goddeeris (2002: 382-85)

5) Renger (1990, 1994, 1995a)

6) 例えば Algaze (2008) を参照。

7) 小泉 (2001: 136-41), Powell (1999)

8) 従属者が給付(配給)に全面的に依存していた、もしくは王宮が資源を完全に支配していたことについて疑問が出てくれば、再分配様式が大域的に優位である主張は揺らいでくる。

可欠となっていたメソポタミアでは，市場諸要素が組織化されて，いち早く市場が生成したと考えるのはおかしいであろうか。紀元前4千年ごろウルクヤササで発見された粘土ボール（ブッラ）とトークンならびに粘土板の諸数字は，物品の勘定や計量，その貯蔵・管理の目的で出現したと考えられている。地域性の高いトークンのみならず，ウルク文化に共通する広域性の高いトークンも確認されており，交易を通じた情報ネットワークが存在していたことを窺わせている⁹⁾。それら工夫が自主的な交換の場から生み出されたものでなく，狭い地域の再分配組織の管理の必要からのみ生まれたと断定することができるであろうか。むしろ，広域に拡大した交易の進展が交易物資の調達の一歩の必要性を高め，物資の管理方法の革新的な変化を促す要因のひとつになったとはいえないであろうか。

さらに緩やかに定義された市場は，慣習的な価格体系の登場を排除しないと思われる。交換の状況が継続的であれば，価格は安定した相場として定着し慣習化することはありうる。もちろん，争乱や気候変動で環境が変化すれば，価格が変動（高騰）することは避けられない。価格を安定させるには供給側の調整が必要となり，そこに都市の公共団体や国家が関与する仕組みが補完的に整備される必要がある。しかし，市場の出現が古く，国家による再分配システムの整備が同時またはむしろ新しいとすれば，市場で平均的に形成された価格体系を反映して，等価体系が国家内で規則化されたと逆に考えることも可能である。

ボランニーが提示した市場諸要素が原初的に存在していたとして，継続的に開かれる市場として制度化されるためには，それらを連合体として組織化する媒体が必要である。その動機づけに利益が反映されていると考えるのは，あまりにも形式的経済学に従っているといえるのだろうか。媒体の役割を果たすのは商人であり，商人が集合して市場を形成し，制度的な工夫を編み出していく。J. ヒックスは，このような商人的経済の出現と展開を通して市場経済が発展すると主張し，利潤動機は市場制度を進化させるうえでのエネルギーとなると考えた¹⁰⁾。慣習経済と指令経済の狭間で，古代の身分制度のアウトサイダーと

これについては Van De Mierop (2004) を参照されたい。

9) ブッラや数字粘土板については常木 (1995)，大貫・前川・渡辺・屋形 (1998: 160-65)。広域型トークンと地域型トークンについては木原 (2006) を参照。

して商人が出現し、商人的経済を形成して市場経済の範囲を拡大していく考えは、古代メソポタミア社会には不適合なものであろうか。

本稿は、以上のような疑問をふまえて、これまでの古代メソポタミアの研究成果を追跡して、紀元前3千年末から紀元前1千年にわたる古代メソポタミアにおいて市場とはなにか、統治体制(国家)との関係はどうか、また商人の役割はどのようなものであったかを再考察していく。以下取り扱われる内容は、次のように展開する。第2節でメソポタミアの地理、環境、気候変動について簡単にふれ、第3節でウル第三王朝時代、第4節で古バビロニア時代(とくに古アッシリア、ハンムラビ王統一以前のバビロニア、統一後のバビロニア)の経済を扱い、第5節では下って紀元前6世紀を中心にして出現した新バビロニア時代の経済を紹介して、最後に結論として全体をまとめることにしたい。

2. メソポタミアの地理、環境、気候変動

メソポタミアは2つの大河に挟まれた地域を意味する。メソポタミアと周辺地域は、チグリス、ユーフラテス両大河の下流域に形成される沖積平野(バビロニア)と天水による農耕が可能となる中流域(アッシリア、ハブール盆地)、そして外縁部としてこれら地域を取り巻く山岳地帯(ザクロス山脈、アナトリア高原地帯)で地理的に構成される。さらに地中海(上の海)に接するシリア、レバント地方とペルシャ湾(下の海)周辺の地域(パーレーン、オマーン)がこれらに付け加わる。両大河に挟まれたメソポタミアは、少ない降水量ながら肥沃な土壌に灌漑を施すことにより高収穫量の多種の農産物を得る穀倉地帯であり、その周辺部で養育される羊から得られる羊毛を原料に利用して毛織物業が生まれ、特産物として外部に輸出されるほどに早くから発展していた。他方で鉱物、石材、木材などの一次的資源は域内で産出されないため、これら資源は外縁部の山岳・高原地帯からの輸入に頼らざるを得なかった。

この構造的といえる生産物・資源の偏在が、早くからメソポタミアに交易を発達させる基本的要因となっていた。交易の必要性は、必然的に担い手となる商人の活躍を促し、付随して商業上の技術と制度の高度な発達をもたらしていた。さらにメソポタミアでは早い時期から都市国家が成立し、それらが競合

10) Hicks (1969)

しながら領域国家，帝国へと発展していくのであるが，国家の基本的単位が都市国家のエリアにあることは変わらず，ひとたび統治機構が衰退もしくは崩壊すると，有力な都市を中心にしたより小規模の独立の国家群に分解していった。しかし，そのような統治体制の変遷にもかかわらず，国家の交易への関心は一貫して変わらず，交易路の確保，外縁地域との通商関係の維持などは時代を通して喫緊の課題であった¹¹⁾。

豊かな生産力は，メソポタミア地方に分業化を早くからもたらし，並行して都市化を促していた。村落の展開と人口集積地として中心に成立する都市は，首長システムが展開されていたウバイド期 (ca.5000~4000BC) を経て，ウルク期 (初期中期 ca.4000~3500BC，後期 ca.3500~3100BC) には，大きく大都市，中小都市，村落が放射線上に展開する形で増加していった¹²⁾。(2ha 以下の) 村落の分布については，ウルク初期中期から後期にかけてバビロニア北部地域から南部地域にその中心が移動していたことがわかっている。ジェムデド・ナスル期 (ca.3100~2900BC) を経て，初期王朝期 (期 ca.2900~2750BC， 期 / 期 ca.2750~2350BC) になると，全体として村落数は急減し，拠点都市に人口が集中するようになる。この時期は都市間の覇権をめぐる抗争が激化していく時期とみられ，小規模の村落が防御上不利になり消失していったのではないかと考えられる。この減少過程は表 1 に示されているように，初期王朝期まで続き，アッカド時代 (2334-2150BC) に最低になったとみられ，その後村落数は増加に転じていった¹³⁾。

逆に都市部の比率は一貫して時代を下るとともに低下しており，その点で田

表 1 集落規模の分布 (パーセント表示)

	ca.2ha	ca.7ha	ca.15ha	ca.30h	ca.100ha	ca.200ha
初期王朝後期	3 .1	6 .8	4 .5	7 .2	66 .3	12 .1
アッカド	6 .1	12 .4	9 .5	8 .5	63 .6	-
ウル /ラルサ	10 .5	14 .6	8 .8	11 .0	40 .4	14 .7
古バビロニア	12 .1	17 .6	8 .4	11 .7	39 .1	11 .2
カッシート	25 .2	31 .6	8 .0	4 .6	30 .6	-
中期バビロニア	32 .5	31 .8	4 .9	14 .6	16 .2	-

資料) Richardson (2007: 17); 原資料は Adams (1981: Table 13: 142)

11) 明石 (2003)

12) Adams (1981)

13) Richardson (2007: 16)

園化 (ruralization) が傾向として生じていたことがわかる。但し、その内容は大きく変化していたことも留意すべきである。バビロニア南部のウルク地域をみると、ウルク期初期に確認された53村落のうち35村落がウルク後期まで存続していたが、初期王朝期 / 期にはほとんど残っていなかった。過渡期のジェムデド・ナスル期と初期王朝期に古い村落は消失し、新しい村落が成立したが、次期になるとまた消失していったのである。他方、ウル第三王朝時代(2112~2004BC)からカッシート王朝時代(1595~1155BC)までの村落の推移は対照的であり、古い村落に新しい村落が付け加わる形で全体数が増加していた。(バビロニア中部にある)ニッブル周辺をみると、全体の村落数の6割が新しく、古バビロニア時代(2004~1595BC)からの村落の7割は存続していた¹⁴⁾。しかし、次のポスト・カッシート / 中期バビロニア時代(1155~612BC)になると、その7割はカッシート王朝時代に成立したものであり、古バビロニア時代から存続していた村落はわずかであった¹⁵⁾。田園化は古いものの消失と新しいものの誕生によって生じていたのである。

さらにウル第三王朝、古バビロニア時代から中期バビロニア時代までの集落全体の動きをみると、中小規模の集落の分布が一貫して大きくなっていった。ニッブル、ウルク、ウルを結ぶ中南部バビロニアの大都市が比率上減少するだけでなく、ニッブル、ウルクを結ぶ河川、運河上に展開していた村落も大きく減少していた。この時期に発生したユーフラテス河支流の流路変更に付随して、洪水による土壌流失などが土地の荒廃化をもたらし、村落の消失につながったとみられている¹⁶⁾。

河川の変更のみならず、気候変動は乾燥地であるメソポタミア地方にとって農業生産上決定的な変動要因となった。この地域は夏の乾燥高温、冬の降雨湿潤の気候にある。冬に極高気圧に押されて地中海に中緯度低気圧が発生し、これが東方に移動してアナトリア、メソポタミアまで雨を降らせる¹⁷⁾。3~5月

14) 年代は中年代法 (middle chronology) によっている。考古学見地からは低年代法 (バビロン陥落を 1531BC と推定) か超低年代法 (1499BC と推定) のほうが古バビロニア時代とカッシート・ヒッタイト時代との接続に無理がないとされている。バビロン陥落の年代推定については Armstrong et al (1998), Hunger and Pruzsinszky (2004) を参照されたい。

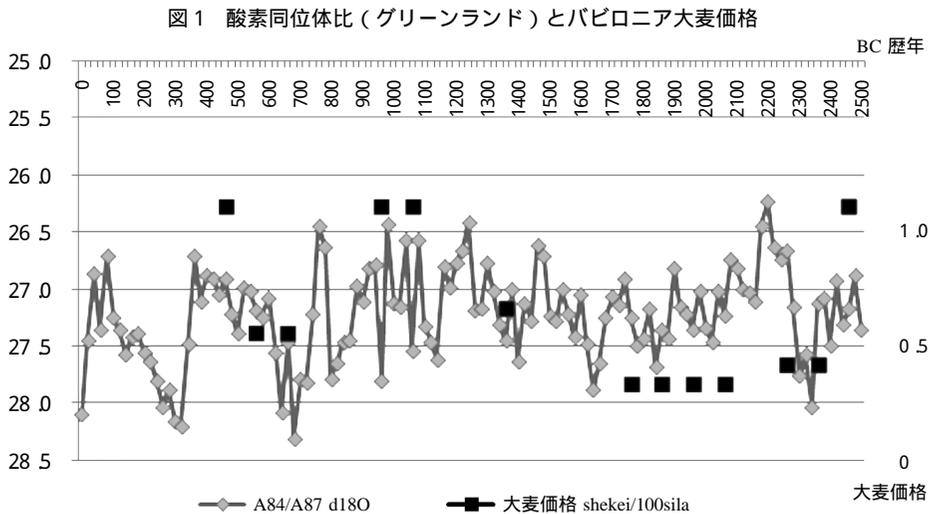
15) Richardson (2007: 17)

16) Gasche (1989)

17) メソポタミア周辺の気候変動については、Fagan (2004: 訳 184) を参照されたい。

の雪解け時期になると，チグリス・ユーフラテス両大河の流量は増大し，それに合わせて土壌の塩抜き，犁入れが行われ，秋口には種蒔が始まるのである。メソポタミアの灌漑農法にとって冬季の地元の降雨のみならず上流域の降水量は，農業生産にとって極めて重要であった。中緯度低気圧の活動は，北極の高気圧帯の強弱に連動しており（北極振動），極地周辺の気温の変化は，中緯度地域の低気圧活動を通じて，メソポタミア地方の農業生産活動に連動していたとも考えられる。長期間の大麦価格の変動は，極地域（グリーンランド）の気候変動と関係を持っていたことが図1からも窺うことができる¹⁸⁾。極地域が寒冷化する時期には，メソポタミア地方は湿潤化し，農業生産にとって有利に働いたと考えられ，生産量の増加とともに農産物の価格が低下するという関係が推量されるわけであり，グラフの価格の動きは極めて不完全とはいえ，気候変動と連動しているようにみられる。

気候は，長期間を見ると節目ごとに大きな変動を起こしていたこともわかっている¹⁹⁾。イベント4と呼ばれる気候変動（5900BP=ca.3950BC）は，太陽活動の衰退により地球規模の寒冷化をもたらしたといわれ，ウバイド期からウルク期



18) 紀元前7世紀から紀元前1世紀間の気候変動と物価（大麦・なつめやし）のより詳細な関係については Huijs, Pirmgruber and Leeuwen (2014) を参照されたい。

19) 明石 (2005)

への交替時期に生じたメソポタミア地方の民族移動と都市国家の形成の一因になったといわれている。5200BP(3200~3000BC)にあたるウルク終末期には再び寒冷化、乾燥化が生じ、初期王朝期にみられた村落の消失、都市部への人口集中をもたらした一因であったかもしれない。イベント3(4200BP)は2200~2000BCに発生した異常気象であり、アッカド時代末期の混乱とウル第三王朝末期の異常気象による穀物の収量低下と政治的混乱(王朝の滅亡)が起きた時期に重なる。イベント2(1200~700BC)は太陽活動の低下と地球規模の寒冷化がみられ、東地中海、メソポタミア地方で大きな政治的変動(海の民の侵略、ヒッタイト王国、レバント諸王国の滅亡)がみられた時期である。この時期をピークに村落数が低下に転じていたことは興味深い。この時期の気候変動や河川流路変更を経て、6世紀の新バビロニア時代(612~539BC)/ペルシャ帝国前期(539~484BC)の直前になると環境や気候は安定してくる。これが「長い6世紀」と呼ばれるこの時代の繁栄を形成した一因になったとも考えられている²⁰⁾。

このように気候変動はメソポタミア地域の経済活動に大きな制約と影響を与えてきたのであり、その構造化された生産活動と交易活動の中で、メソポタミア内部で都市国家の成立と抗争、そして統合化と分裂が繰り返されてきたといっていよい。経済の領域は、メソポタミア特有の環境と気候に一方では制約され、他方では国家の統治機構の変遷によりその活動が制約、制度化されるという形で、相互に影響を受けてきたといえる。自然の制約が経済活動に影響を与え、それが国家の基盤を形成するまたは侵食するという回路がある一方で、政治的枠組みが平和の維持または戦争の勃発をもたらし、さらには各種の法律や規制に代表されるように制度の形成と変更を促して、経済的活動に大きな影響を与えるという、反対方向の回路があるわけである²¹⁾。以下の節では、ウル第三王朝時代、古バビロニア時代、そして新バビロニア時代をとりあげて、このような経済と政治(国家)の相互作用の力学を認識して、古代メソポタミアを題材にして市場と国家の間の相互作用と補完的關係をクローズアップしていくことにしたい。

20) Jursa (2014a)

21) 明石 (2005)

3. ウル第三王朝経済

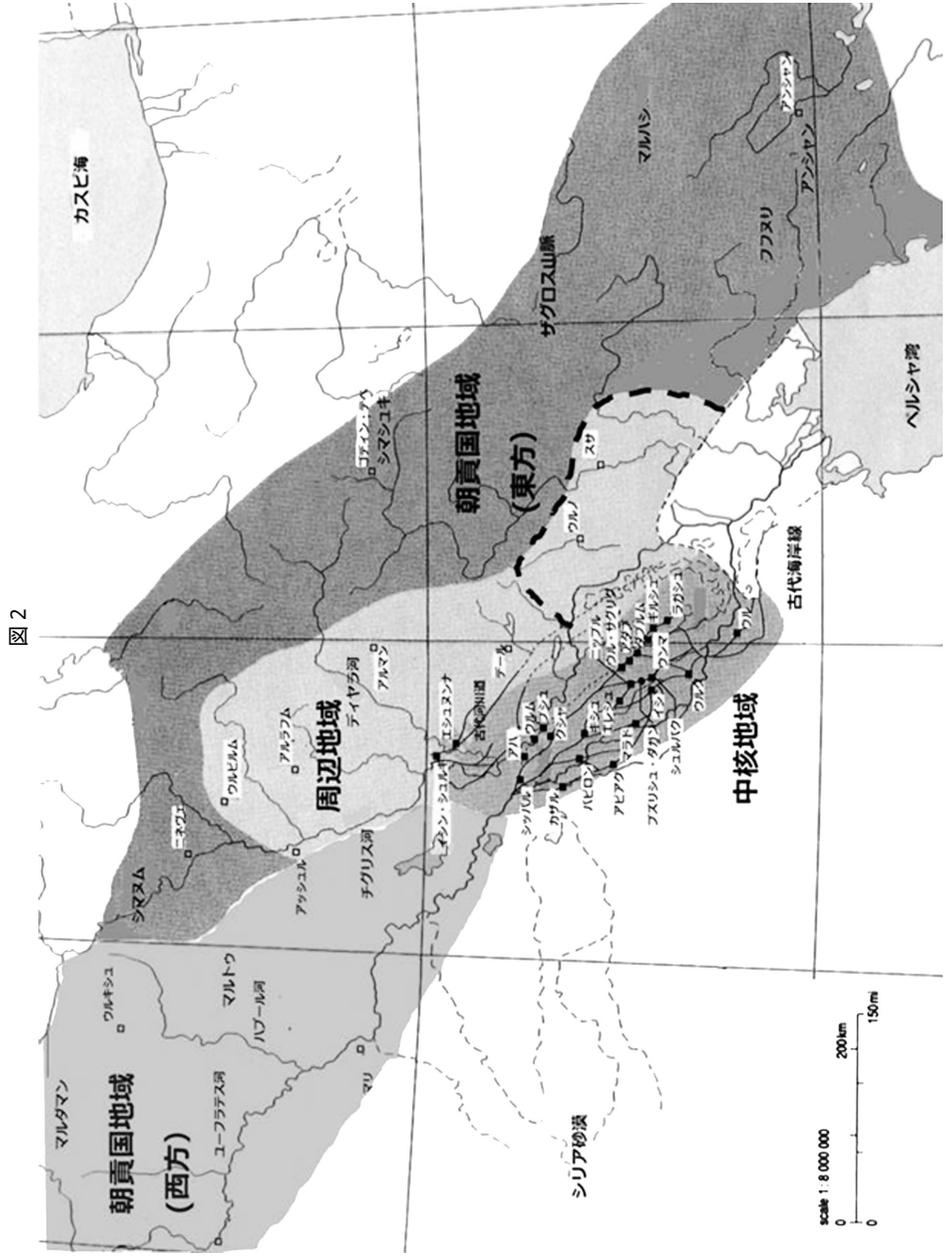
ウル第三王朝はウル・ナンムによって創設されるが，その統治体制が整備されたのは次の国王シュルギにおいてであったといわれる。シュタインケラー (Steinkeller 1991) によれば，シュルギによって次のような一連の改革が行われたとされる。すなわち，1. 国王（シュルギ）の神格化，2. 駐留軍団の設置，3. 神殿公共経営体制の再整備，4. 南北バビロニアの統合管理体制の創設，5. パラ義務システムの導入，6. 大規模官僚機構の設置と書記学校システムの創設，7. 文字体系の抜本的改革，8. 新会計・記録手続きと新型文書記録システムの導入，9. 度量衡システムの再整備，10. 新暦（統一暦）の導入などがあげられ，都市国家レベルを超えて帝国領域の統治を実行するのに必要なインフラストラクチャを構築するための一連の改革であったことがうかがえる。また，ウル第三王朝時代になって「統一国家の王権にふさわしいイデオロギーと制度が整えられた」（前田 1995: 125）ともされ，その具体例として国王の神格化のほか，国王讃歌の作成，法典の編纂，国王＝牧人の呼称，王名表の編纂などがあげられている²²⁾。

ウル第三王朝の統治体制は，南北バビロニア（シュメール，アッカド）の旧都市国家群を中心にした中核地域と，防衛地帯 (defense zone) となるチグリス川東岸一帯を中心とする周辺地域，ならびにその外側に位置する朝貢国・部族が位置する外縁地域に大きく分類される。中核地域の各都市は地方の有力者で国王から任命された知事（エンシ）によって統治されていた。他方，軍事面では知事とは完全に独立な将軍（シャギナ）が存在し，おもに国王近親者や家臣で構成され，宰相（スカルマ）や国王自身の直接指揮下にあった。将軍ならびに指揮官（ヌバンダ）は中核地域や周辺地域の戦略的都市や軍事基地に駐屯する軍団の指揮をとり，帝国の防衛，治安を担っていた。宰相は，行政，軍隊，外交，司法などを管轄し，周辺地域の管理に関与し，全体では一種の副王の役割を果たしていたと考えられている²³⁾。

したがって帝国の中核地域は，民政面では知事を通じて旧都市国家時代の統

22) 前田 (1995: 125-26)

23) Steinkeller (1991: 21)



資料) Roaf (1990: 103), 前田 (2003: 82) を参考に作成

治体制を主要都市ごとに温存する一方で，軍事面では中央の管理下にある將軍を要所に配置して帝国全体の防衛機能を組織化するという二重統治体制にあった。將軍は知事とは対等地位（または格上）にあり，中核地域では東南部と西北部に配置され，周辺地域にはチグリス川東岸にそって北部から南部にかけて各都市・基地に配置されていた。具体的には東南部はウンマないしその周辺（マシュガン，ナガス，ガルシャナ）でありチグリス河口部からの侵入に備え首都防衛として，また西北部はカザル，アピアク，マラド，クシャであり，北方ならびに西北部からの侵入に備えて軍団が配置されていたと想定される。北方ではディヤラ川流域やキルクーク地区に駐留していたとされ，チグリス河東岸で上流地域にあるウルビルムを頂点とし，東の端をデール，西の端を（エシュヌン西方にある）トゥトゥブとする三角形の地域ないにある拠点に配置されていたと推定されている²⁴⁾。

周辺地域は防衛ラインという性格上，將軍が知事（エンシ）を兼務する場合もあり，いわば軍政を敷いて地域を統治していたと考えられる。將軍・指揮官の指揮下，兵士（エリン）が駐留する都市（町）ないし基地は知事（エンシ）が支配する都市とは別にあり，知事支配の人々に將軍の徴発権が及ばないよう両者の権限は分離されていた。將軍が駐留する都市には市長（ハザヌム）が存在し，民生一般を司っていた。知事が支配する都市が旧都市国家地域であるのに対し，將軍が支配する地域は国王の新開地・直轄地であり，そこに新たに軍団駐留都市を建設することにより，旧都市国家体制を温存した帝国領域を統治する支配網を構築しようとしていたと考えられる。

財政面をみると，中核地域ではバラ (bala) 義務が施行され，各都市にローテーションを組んで賦課・租税（おもに大麦，家畜，葦，木材，製品など）や労働奉仕が課されていた。この点でバラ義務は「中央政府を扶助するため属州（都市）の富を強制的に貢納させる」（Sharlach 2004: 21）機能を有していたとされる。中核地域から納められる各物資は，プズリシュ・ダガン（現ドレヘム）にある再分配センターに送られた。周辺地域ないし軍事基地居住者（兵士）からはグンマダ (gun ma-da) 税が課され，兵士のランクに応じ，家畜（牛，羊）が納められ，同じくプズリシュ・ダガンか他の再分配センターに送られた。兵士ランクに応じた賦課であることから，駐留兵士にはおそらくランクに応じた土地給付，

24) 前田 (1990: 83), Maeda (1992: 154-5), 前田 (1994: 68)

または現地への徴発・徴用権が認められて、その中から賦課に依拠していたと考えられる。さらに外縁地域からは、それぞれの支配者から貢納物 (gun) が納められ、その品目は家畜のみならず木材、シロップ、銀など多岐にわたっていた²⁵⁾。

バラ義務にはいろいろな解釈があるが、用語上は巡回 (ローテーション) を意味しており、その本来の性格は、各属州の知事や神殿管理者がニッブルにある最高神エンリル神殿むけに供される奉納物を月ごと巡回式に提供するという義務を課されていたところからきている。さらに中央政府への租税という性格があり、その一方でプズリシュ・ダガンに集められた家畜は一種の基金の性格を持っていた。属州知事などはバラ義務負担の見返りに家畜を引き出して必要なものをえるために使用することができたとされる。そこから延長して中央神殿に生贄を提供する属州知事は家畜の使用権を保持することができるという、バラ義務体系を権利付与システムとしてとらえる見方も出ている。しかし、バラ義務が中央神殿の供儀向けという性格をもちながらも、その多くが中央政府を支えるために聖地ニッブルのほかに集積地であるプズリシュ・ダガンや首都ウルに送られるという実態があり、その意味で「バラシステムの最善の特徴は租税という用語」(Sharlach 2004: 21) にあるという主張はより説得的である。

シャーラッチによれば、バラ義務としてウンマ (Umma) から支払われたものの多くは農産物、製造物、労働を含んでおり、とりわけ大麦についてはウンマ属州直轄地の大麦総生産の 43 - 48% にのぼっていた²⁶⁾。このほか柳材、葦、穀物などがウル、ニッブル、プズリシュ・ダガンに搬送されていた。熟練、未熟練労働者も首都における作業のために送られ、期間は数カ月に及ぶこともあった²⁷⁾。ラガシュ (ギルシュ) からは年間 3, 4 カ月におよぶ奉仕が課されており、負担の大きさはラガシュの帝国における重要性を象徴しているといえる。ギルシュ知事直轄下の大麦総生産のうち 48% が「バラ支出」として計上され、その数量はウンマの 5.7 倍におよんでいた。穀物だけでなく、莫大な数量の女性労働者、木材、葦、香辛料、陶器、アスファルトなどがバラ支出項目としてあげられている。とくに大量の大麦を含んだ各種食糧、燃料、容器などがギル

25) 前田 (1990: 85)

26) Sharlach (2004: 30, 160)

27) Sharlach (2004: 54-56)

シュ知事のバラ支出品目としてウルに送られており，その内容からウルにおける神殿供犠，王宮人員食事，家畜飼料などに使われたと推定される²⁸⁾。

労働については，ウンマから書記，葦細工職人，皮革職人など熟練労働者がウルやエサグダナ（プズリシュ・ダガン）に送られたという記録があり²⁹⁾，ラガシュからは多くの船員がニップル，ウルに滞在したことや，製粉作業や家畜屠殺，その他王室むけの作業に労働者が割り当てられたことなどが記録されていた。バラ支出の一項目として，王室むけの各種奉仕のための人員が属州からニップルやウルに派遣されていたことが窺える。さらに家畜はバラ支出品目の重要な要素であり，その流れについては，ニップルやウルの神殿供犠むけ生贄として属州知事から送られ，それら家畜の飼料またはプズリシュ・ダガンに集められた家畜の飼料は属州から提供されていた。そして反対に国王から知事に送られる家畜もあり，バラ支出として（バラの用語が明記されない場合も含めて）プズリシュ・ダガンの役人から属州知事に家畜が支払われていたことがわかっている³⁰⁾。

属州は年間を通じ，通常一カ月，バラ義務を巡回で果たしていたのであり，中央神殿の供犠向け生贄を提供するための財政的な責任を負っていたと考えられる。このために発生する費用は担当属州の責任であった。同時にバラ義務システムは，属州の生産物への租税または割り当て（quota）の側面を持ち合わせていて，負担義務が属州間にローテーションで割り当てられていたと同時に，負担に対応する財・サービスの内容も担当となる属州と王室の間で意思疎通され決められていたと考えられる³¹⁾。

このように，中核地域の属州都市からは中央政府に必要な物資をバラ義務としてローテーションの形で負担させる体制が整備され，周辺地域には駐留軍団を配置しておそらく将軍に徴発・徴用権を認めて軍団の強化をはかることを認めて，その代わりに軍団側からグンマダとして家畜が納められていた。外縁地域の支配者にはその恭順の象徴としてグナ（貢納）が課せられ，その品目は地域に応じて多岐にわたっていた。これらの物資とくに家畜が再分配センターで

28) Sharlach (2004: 70-76)

29) Sharlach (2004: 54-55)

30) Sharlach (2004: 121-123)

31) Sharlach (2004: 161-62)

あるブズリシュ・ダガンに集められ、また祭祀奉仕ならびに王室に必要な物資が最高神エンリルを祭るニップルならびに首都ウルに送られていたものであり、一部は属州都市周辺の軍団基地に食糧などの物資が送られたであろう。ちなみに中核地域外であったエシュヌナとスサが第三代国王アマルシン以降バラ義務を負うことになり、中核地域が拡大したと考えられ、これに対応して「これら両都市には貢納家畜を集積する一大家畜場が設置されていた。」(前田 1990: 92) 他方、中央政府からは属州知事に家畜などの再分配があったことは先に示したとおりである。これらのことから、ウル第三王朝での財政面からみた場合、帝国内の主要地域・拠点から物資が中央政府へ送られていたものであり、対応して帝国の統治を維持するための祭祀、軍事、インフラストラクチュアなど管理にかかわる支出がおこなわれたと考えられる。すなわち帝国経済が再分配経済ないしは指令経済の特徴を色濃く示していたことは否定できない。

中核地域の属州都市については、国王が現地の有力者などを知事(エンシ)に任命してその支配権をゆだねていた。おそらく属州によってその都市支配者の経済的組織は異なっていたと思われる、例えばラガシュ(ギルシュ)では神殿組織が公的経営体となって支配者の管理下にあったが、ウンマでは経済活動の分野ごとに部局(bureau)があってその活動が管理されていた。しかし、その経済的基盤は初期王朝時代の家産的な経営体にあったといわれる。ラガシュのケースを見れば、家産的経営体は初期王朝時代のラガシュの支配者妻の家(エミ e-mi)において代表され、その特徴は「直営地と労働組織の存在」であり、「それと労働組織を支える大麦給付とクル地支給」によってこの経営体は機能していた³²⁾。支配者妻の家は、多くの男女従属民を抱えており、彼らは組織内の特定日常作業に従事し、その報酬に大麦が給付されていた。それとは別に支配者妻のため組織された労働集団(ama-ERIN₂)があり、いわば労働者/兵士集団も抱えていた。彼らにはクル地が支給され、一部は交替で軍隊として支配者のもとに派遣されており、軍務につかない場合は本業に戻るか、非特定日常作業(運河浚渫や建設など)に従事していた。兵士となった人々の大部分は俸給として耕地(クル地)が与えられ、死亡とか後継者がいないときは収公された³³⁾。

このような家産的経営体の基本様式は、ウル第三王朝期のラガシュ(ギルシ

32) 前田(1995:128)

33) 田中(2007)

ユ)においても神殿名を付した公的経営体として受け継がれていた。特定期間徴用される形で érin/éren と呼ばれる労働集団が存在しており，労役期間は運河の浚渫や建設に従事して，食糧として大麦が配給されており，俸給として耕地が給付されるほか，大麦で給付されて土地をもたない所属民もいた。耕地が給付される場合では，永年耕作と相続が認められていたようであり，また給付地をもとに賃貸契約が行われ借地農が成立してもいた³⁴⁾。他方，労働集団の一部が非労役期間（待機期間）にある場合は，別途雇用される形でいわば大麦が賃金として給付されていた³⁵⁾。この背景として「雇用労働がウル第三王朝時代には労働力の主要な源泉になっていた」という指摘がなされている (Maekawa 1987)。ラガシュには知事支配下だけでなく国王に直属する巨大な製粉所や織物工房が存在しており，それらの人員（女性労働者など）の確保は都市の各階層からの献納 (a-ru-a) に負うことが大きかったといわれる。これらの点からもこの時期の公的経営体が初期王朝時代の独立自営的な経営体の原則から外れた存在になっていたことがわかる³⁶⁾。

ウル第三王朝経済とくに属州都市経済についてさらに具体的にふれてみたいが，これについてはシュタインケラー (2004) がおもにウンマ資料にもとづいてウル第三王朝経済を特徴づけている。彼によれば，ウル第三王朝国家は典型的な家産制国家 (patrimonial state) であり，相互の権利と義務のネットワークで繋がり，単一の階層構造を形成する個別経営体の集合体である³⁷⁾。すべての耕作地は神殿保有地も含めて国王の所有となっており，これら土地は社会的地位や職業に応じ奉仕と引き換えに土地給付 (SUKU) の形で国王により国家従属者 (éren, érin) に分配されていた。この点でこの社会は国王対国家従属者の関係体 (erenage system) であるとさえ述べている³⁸⁾。

もう一つの特徴は，その社会的職業的地位に応じた国家による割当 (quota) 体系があって，そのもとでこの経済が運営されていたことである。職人を例に

34) Kraus (1976), Waetzoldt (1978), Van Driel (2000)

35) Maekawa (1987)

36) 前田 (1995: 129)

37) しかしながら，ガーフィングルによれば，ウル第三王朝国家は家産制国家としては不十分で，「資源を管理，監督するためにウル国王は権力と権威の地方ネットワークに広範囲に頼っていた」(Garfinkle 2008b: 60) とされる。

38) Steinkeller (2004: 93-94)

とれば、各職人は半年間フルタイムの労働を国家(ウンマ政府)に捧げ、おもに家族所有の工房で作業をして割り当てられた数量の製品/生産物を供給しなければならなかった。しかし、残りの時間は自分自身のために独立に働くことができ、この分の生産物を(属州内部の)地方市場に供給することができた。

このような職人(生産者)による商業的活動は文献資料には表れないが、十分に行われる余地があった。というのも、人々が日常的に使用する財、つまり陶器、家具、靴、衣服、穀物以外の食料すなわち野菜、果実、乳製品、肉、香辛料などのどれもが(公的経営体を含めた)中央当局からは分配されなかったのであり、彼らがどのようにして日常財を入手したのかは市場の存在なしに説明できないからである。社会的・職業的地位に対応して(奴隷を含めた)従属者に国家から支給される大麦給付(ときにはゴマ油、羊毛などの給付)は、用語上配給(rations)とよばれるが、その配給量は受給者の日常必要とされる量を超えており、余分の穀物で他の日常必要な財を交換することができたという意味で、この配給はむしろ俸給(サラリー)とよぶ方が適切であるとのべている³⁹⁾。

次に商人であるが、ウル第三王朝時代の商人(dam-gār)は国家従属者(éren)の地位にあり、土地給付やほかの食料給付を国家から得ていた。その業務は、外国交易品を入手して国家に提供し、非耐久財などの在庫を保有して国内の各部局に再分配することなどにあつた。このほか、商人は純粋に私的な商業活動にも関与しており、貸付業や限定的だが卸売業などに従事していた。例としてウンマ政府は30人ほどの商人を雇っており、彼らは属州内で入手不可能な数多くの財を入手して、これら財を属州内に分配する作業を行っており、さらにさまざまな属州内産物(果実、野菜、塩、獣脂、魚など)の集積と分配にも携わっていた⁴⁰⁾。

商人とウンマ政府の財務当局(fiscal office)との関係であるが、財務当局は個別の商人と継続的に口座を開設していて、定期的に資本を穀物、銀、羊毛の形で振り込んでいた。その移転は、封印された受領タブレット(粘土板)で記録されていた。同時に商人が倉庫に保管しておいた財を他の部局が必要に応じて引き出していた。このような取引も封印されたタブレット上に記録され、商人により保管されていた。一年ないしそれ以下の期間で商人は手元の受領書を財

39) Steinkeller (2004: 95-96)

40) Steinkeller (2004: 98)

務当局に提示し，財務当局はそれらをまとめ，商人の支出に対して投入資金の金額を計算し，残高を記載した。ウンマ政府から提供される資本以外に，ウンマ商人は彼ら自身の資本を保有しており，倉庫も所有していた。

彼らはギルドまたはそれ同様の企業体として行動し，属州政府に対して商人側の立場を代表していた。そこには商人長がいてメンバー間の資本の分配や購入活動の調整，紛争仲介などを担っていた。商人ギルドはメンバーによる自己統制的組織として存在したわけであるが，個別の商人はまた知事や神殿管理者の従属者になることもあった。以上の点で商人たちは制度的には属州組織の一部をなしており，その点から中央政府の管理下にあったともいえる。ちなみに3つの属州（アダブ，ウンマ，ウルク）の商人ギルドはニップルに支局をおいており，ニップルで彼らは土地給付を得ていた。これは国家（中央政府）により給付されたと考えられ，この点でウル第三王朝商人は属州政府だけでなく，中央政府にも同様のサービスを提供していたといえる。外国製品に関しては，文献上明確でないのであるが，おそらく商人または代理人が属州を越えて外国物品を入手していたと推定されている⁴¹⁾。

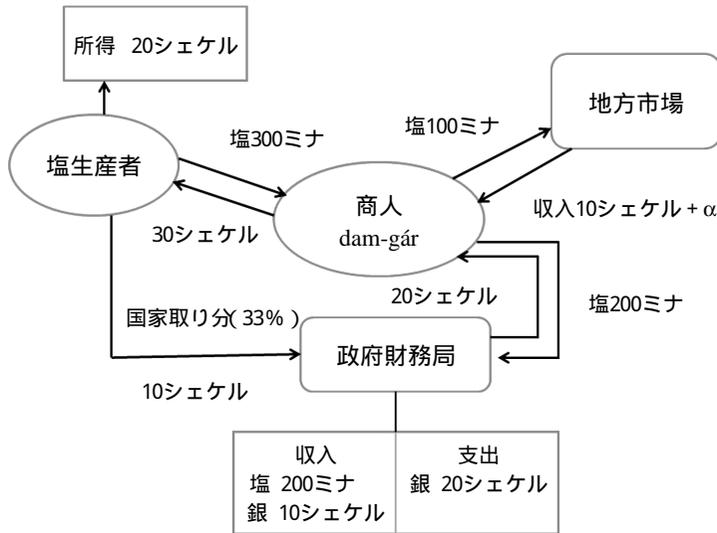
ウンマ商人との取引で，商人は銀行家と似た活動をしていた。ウンマ政府との取引は商人たちに一定の流動資産を提供していたからである。商人たちはその資本の多くを使って倉庫を物財で充たしたが，残りは利子つき貸付として貸出を行っていた。また貸付業のほかに，商人は局地的に生産されたさまざまな商品（果実，獣脂，魚など）を取り扱っていた。これら商品の供給者は，例外なくウンマ政府と係っていた。塩生産者，野菜・ハーブ・ゴマ生産者，森林業者，獣脂加工業者，漁師などである。彼らはほかの従属者と同様，一定量の生産物を国家（ウンマ政府）に提供することがもとめられ，労役も受けなければならなかった。そのかわりに土地給付を受け，食糧と他の産物を支給されていた。

生産者たちはその生産物の代わりに銀で財務当局に支払ってもいた。その数量は一貫して大きく，その支払いが当生産者に付加的に課せられていた租税・賦課とは考えにくい。生産者は国家への支払いを実物か銀で行っていたと考えられ，後者の場合，生産者は最初に国家への割当分を第三者に販売して銀を入手したことになる。第三者との間にはウンマ商人が介在していたはずである⁴²⁾。

41) Steinkeller (2004: 99-102)

42) Steinkeller (2004: 105-107)

図 3



この財と資金の関係についてはシュタインケラーによる注があり、次の図 3 でその関係が描かれている。塩生産者を例に挙げると、生産者は塩 300 ミナ (150 kg) を生産し、その三分の一を属州政府に割当として納入しなければならない。それを生産者は塩 10 ミナ = 銀 1 シエケル (8.3g) の公定価格で商人に 300 ミナ売却し、銀 30 シエケルを手に入れて、そのうち銀 10 シエケルを属州政府に割当分相当として納付する。残り 20 シエケルは生産者の所得となる。他方、商人は塩 300 ミナのうち 200 ミナを属州政府の使用分として納入する (実際は商人が在庫として保管し、政府の需要に応じ随時引き出される)。そのための資本は予め財務当局から銀 20 シエケルとして商人に振り込まれている。商人は残り塩 100 ミナを属州内市場に持ち込み市場価格で売却して銀 10 シエケル + アルファを得る。商人の利益は公定価格と市場価格の差額分対応して計上されることになる。このフロー図は商人が属州政府と取引をする公的部分と地方市場の取引に代表される私的部分を簡潔に描いているが、資金循環の点からは完結していないことに注意されたい⁴³⁾。

ウル第三王朝経済を古バビロニア経済と比較したとき、根本的違いとして古バビロニア期では王室が農業生産に直接関与しなくなっていたことがあげられる。ウル第三王朝以前、種蒔から収穫まで農作業は属州政府 (公的経営体) に

43) Steinkeller (2004: 108, n. 62)

より実行されたが，古バビロニア期では作業は私的企業家に委託され，私的活動の領域が大幅に拡大していた。しかし，古バビロニア王国も家産制国家であったところでは，本質は同じであった。また，ウル第三王朝経済は市場経済であったかについては，シュタインケラーは否定的である。最小の形で市場はメソポタミア社会に存在していた。しかし，ウル第三王朝経済をみたとき，地域的な価格変動の証拠はあったが，広大な領域での一様な価格変動はなかった。卸売活動はあったが，国家管理下の交換に比べると，その活動は最小限にとどまっていた。何よりも労働市場と呼べるものは皆無であり，このような点から自動調節型市場経済といった意味合いでは「市場経済」がウル第三王朝時代に存在したとは言えないであろうと論じたのである⁴⁴⁾。

確かに上記の意味で「市場経済」は前近代世界では存在していなかったであろうし，自動調節という条件を付する限り，そのような市場経済が近代以後でも成立していたかは必ずしも意見が一致するものではない。少なくとも近代以前の社会において市場（または交換）はあまねく人間の活動に關与するものではなく，ポランニーの提唱する再分配や互酬という社会統合の様式を取り入れた，時代固有の様式の組み合わせがあって人々は経済活動を営んでいたというべきであろう。ただし，古代（その対象期間ははなはだ長いのであるが）において交換しいては市場の領域が常に限定的であるというのはいささか早計であるかもしれない。公的経営体に属する人々とくにエリンと称される集団が労役義務となる（運河浚渫などの）非特定作業を果たす見返りに，その食糧分として配給を受けていたのであるが，その期間は60日程度であり，それ以外にいわば雇用労働者として20～30日同じ作業に雇われ，一日あたり4シラ支給されていた。労役には標準一日あたり2シラ配給されていたとすれば，2倍の賃金が支払われていたことになる。

雇用労働の範囲がエリン民衆を含めて広がっていたことを示唆し，「雇用労働がウル第三王朝時代には労働力の主要な源泉になっていた」（Maekawa 1987: 69）という見解につながる。さらに労働がキャンセルになった場合，予め報酬として受け取っていた分を返却しなければならなかったが，それは銀の形でなされていた。通常エリン民衆は労働報酬として大麦を受け取っていたのであるが，このことは部分的に銀で支払われていたことを意味し，より広範囲に銀が

44) Steinkeller (2004: 109-11)

ウル第三王朝期の人々の間で流通していたことを示唆する⁴⁵⁾。

賃金についてふれると、収穫作業や建設・れんが造りでは一日あたり5~7シラであり、平均して通常の雇用労働者は一日6シラ大麦の賃金を得ていたと考えられ⁴⁶⁾、ときには3倍から5倍の破格の報酬が支払われたケースもあった⁴⁷⁾。これはウル第三王朝期での労働不足を反映し、「通常の賃金で働く潜在的な働き手を惹きつけるような調達上の工夫」がなされている必要があったことを意味する。先に提示した労役に対する配給は、エリン階級で2~2.5シラ/日であり、UN-il₂と呼ばれる階層(おそらく若者、年長者、病弱者)や女性は1~2シラ/日であり、その熱量は日々の生活を維持する程度であったと思われる。エリン民衆は、労役期間は食糧配給を得て作業に従事し、他の期間は本来の職を持つ者は本業に従事し、特定職業に無いものは種々に雇用されることになったのであろう。土地給付を受けるものは実際査定された量の大麦を受け取っていたようであるが⁴⁸⁾、場合によっては直営地の種蒔、収穫作業をしていたようである⁴⁹⁾。土地はエリン階級で3~6イク給付されていたが、3イクであれば標準生産力500シラ/イクでおよそ4シラ/日であり、査定が低く半分にもみないとすれば食糧配給分と同じになる⁵⁰⁾。賃金は倍以上になっていることからエリン階級だけでなく、その他庶民も生活維持水準以上の収入をみつけて必要な食糧以外の日常品を獲得しようとしたであろう。先に述べた給付が実質上サラリーであるという事情には上記のような補足的部分が付加していたとみるべきである。

労働市場を示唆する資料として、ウンマ属州にあるガルシャナ基地の建設工事(とくに基地を囲む外壁の工事)に従事した奴隷ならびに自由労働者の事例がある⁵¹⁾。工事には將軍の経営主体に属する奴隷グループがあり、基地の設備を使って皮革品、織物を製造し、洗濯業に奉仕、また施設の建設に熟練技術者として参加などしていた。他方、自由労働者は奴隷人数を凌駕して、そのうち女

45) Maekawa (1988: 71)

46) Steinkeller (2002: 129, n. 8)

47) Steinkeller (2002: 119)

48) 前川 (2005: 172)

49) Maekawa (1988: 60)

50) 1シラ = 0.842 ℓ, 1イク = 3.600m²

51) Heimpel (2009)

性労働者が3分の2を占めてレンガ運搬人として働いていた。多くは周辺の町村から集められ、おそらくは常駐する兵士の妻かその大家族のメンバーであったと推測されている⁵²⁾。賃金は一日大麦3シラであり、他方奴隷は食糧配給のみを受け取っていた。男性労働者は少ないが名誉ある労働構成員であり、おそらく他の経営主体からきていた。とくに建設労働者は高度な熟練職人であった⁵³⁾。このような状況を総合して、アダムズは「多数の女性労働者の調達と雇用は、建設関連の技術を持った男性労働者の調達・雇用とともに、今日の労働市場と似たものを示唆する」と述べ、さらにこれは「労働市場の不在」(Steinkeller 2002)や「使用可能な労働の不足」(Garfinkle 2004: 6)というこれまでのウル第三王朝期の特徴とは対照的であるとも述べている⁵⁴⁾。

労働の調達・雇用の機微に関しては、先に挙げた羊飼(shepherds) がいる。バラ義務や祭礼用に割り当てられた羊頭数や羊毛量の提供のため、数多くの羊を養育しなければならない。このためには特殊技術が必要であり、特定のエリン身分の羊飼いに給付が行われて職務を特定化したとしても、そのアシスタントにはやはり特定の技術を持つものが必要であり、その確保には政府に頼らず、近親や同業の関係者などの互酬・協同的関係をもとにして必要な人手を独自に確保しなければならなかったであろう⁵⁵⁾。これが示唆することは、政府から各部局を通じて物資の割当を生産者に提示し、その成果をあげるのに必要な労働を形式的に提供するとしても、究極のところその労働の割当を確保するのはやはり指令された各国家構成員(エリン)であり、提供された労働で賄えない分や、熟練技術を要する労力の確保などは各自の担当生産者が自己責任で負担せざるを得なかったということである。

ウル第三王朝政権と被給付者、賦役労働者、被雇用者の間には、このような成果の実現を強要されていた点で緊張関係があった。成果を実現するために労働の強化や競争的な労働確保があり、他方では労役による死亡や負担からの逃亡があって、種蒔や収穫など繁忙期などでは労働不足が少なくとも存在していたであろう。労働不足の下で労働力を確保するためには、結果として下層にい

52) Adams (2010: §4.1)

53) Adams (2010: §4.5)

54) Adams (2010: §5.4)

55) Adams (2006: 154, Ibid 2008: §8.9)

る労働者の厳しい労働環境を緩和せざるをえなくなったかもしれない。エリート(ないし委託された企業者)が保有する給付地や直営地での雇用は、下層労働者の所得確保の機会となったであろうし、国家の賦役負担を避ける手段として、非公的な雇用機会を追い求めることは、それが公開の労働市場とはいかないまでも、かなり需要の高いものであったと考えられる⁵⁶⁾。

このような都市周辺部(または下層部)に存在する人々が、政府レベルで把握される人員とは別にあつて、政府による割当生産量を実現するため補足的に雇用されて、所得を得る機会を得ていたこと、ならびに生産者(職人)自体年間を通じ私的に活動する期間(半年)があつて割当生産量以外に物財を供給しえたことは、政府レベルであがつてくる物資とその再分配とは別次元で(いわば地方の市場を介して)財・サービスと資金がながれる部分があつたことを示唆している。そしてこの部分(庶民の日常生活)は、アダムズの言うように政府レベルでは無関心であるか、または無視されていたのである⁵⁷⁾。

他方これとは別に一部顕在化された形であるけれども、政府を通じた資金が商人を含めた企業家(entrepreneurs)と呼ばれる仲介者を通じて市場取引を含みながら流れ、彼らの調整者としての役割が政府レベルの活動を支えていたことも指摘しなければならない。ガーフィンクルによれば、中央政府による経済の効率的運営は、企業家と呼ばれる存在に負っており、その活動は国家によって制御されていなかった⁵⁸⁾。属州政府の高官たちにとって、王室との関係(地位)と彼らの役所の威厳を維持することが重要であり、その維持のためには借り入れが不可欠と信じられていた。彼ら自身経営主体(household)の長として、信用を求め、債務を得ることができる地位にあり、その公的な能力を使って借り入れをすることもあつたわけで、公私の区別は曖昧でもあつた。例えば、牧人(羊飼)の地位にあつた人物がいて、彼は貸付業に深く関わっており、属州の高位管理者や軍人に信用を供与していたことがわかっている。このケースは、属州の高官、軍人らがその牧人長のような公的経営体とは異なる個人の信用を必要としていたことを示しており、また牧人長にとって貸付業が彼の主要な収入源であり、羊飼の日常活動には直接関わっていなかった⁵⁹⁾。

56) Adams (2006: 162-63)

57) Adams (2006: 165-66)

58) Garfinkle (2012: 137)

また企業家には私的農業企業家としての側面もあり，給付地を割り当てられた被給付者は，その給付地を担保にして借入れをすることがあり，企業家は信用を供与して給付地を借地し，耕作に必要な資源（種籾，役畜，耕作者）を調達して耕作チームを編成して耕作にあたらせた。例としてあげると，書記というタイトルをもったある人物は，農園の管理を委ねられた管理者として活動する一方で，軍事的な人的関係から，給付地を借りて耕作し，通常の商業的利息（33%）をつけて信用を供与していた⁶⁰⁾。

これら貸付業，借地農としての活動のほかに，企業家としての重要な活動が商業である。商人は交易の仲介者として，政府（ないし各部局）や神殿などの公的経営体（institution）の事業遂行に不可欠の役割を果たした。経営体で直接入手できない物資は，商人間のネットワークを通じて入手されていたわけであり，商人がその知識とネットワークを使い外部と接触できたゆえに，商人は国家ないし公的経営体により使われたのであり，逆にそれらは商人の最大重要な顧客であった。すでに述べたように，ある一団の商人はバラ義務遂行のエージェントとして活動しており，その団体の監督（商人長）はその傘下にある商人たちへバラ勘定にある資金を配分して交易を指示し，またバラのため物財を受け取り，銀を支出していた。例えば，ある商人集団を率いる商人長がいて，おそらくバラから得られた資源を換金化した銀をブズリシュ・ダガンで受け取って，国王の祝祭向けに必要なとされる金の調達を行っている⁶¹⁾。傘下の商人たちは配分された銀を元手にそれぞれ金入手し，収集された金は中央政府に納付されたのであろう。ブズリシュ・ダガンはバラ義務などによる物資が集積する地点であり，中央政府（国王）はその集積と管理業務を専門性と組織力の点で商人たちにゆだねざるを得なかった。代わりに商人たちは国家のために必要な物資の調達に寄与したのである。

中央政府や属州政府のみならず，神殿など公的経営体は詳細な運営計画を作成し，事前に年間の収入・支出計画つまり予算を確定させていた。しかし，その計画は農業を主とする経済では収穫の変動により大きく狂うことがあった。経営主体下にあるさまざまな部局は，それら想定予算内に収支が留まることが

59) Garfinkle (2012: 36-37, 138)

60) Van Driel (2000: 18), Kraus (1976: 185-205), Waetzoldt (1978: 201-05)

61) Garfinkle (2008a)

期待されており、事後的に生じる計画の齟齬は商人たちによってうまく埋め合わせされていたのである。ガーフィングルが述べているように、ウル第三王朝時代の企業家には数多くの機会があり、彼らは資産（動産、不動産）を取得し、貸付業で大金を前貸しし、冒険的な交易事業に従事し、国家と公的経営体と商業的關係をもち、彼ら自身経営主体 (household) を持ち、管理していた。これら取引は社会的慣習により決定、制御されていた。それらはまた、一見高度に集権化され管理されていたウル第三王朝国家が、伝統的⁶²⁾地方エリートにかなりの程度依存していたことを意味している⁶²⁾。

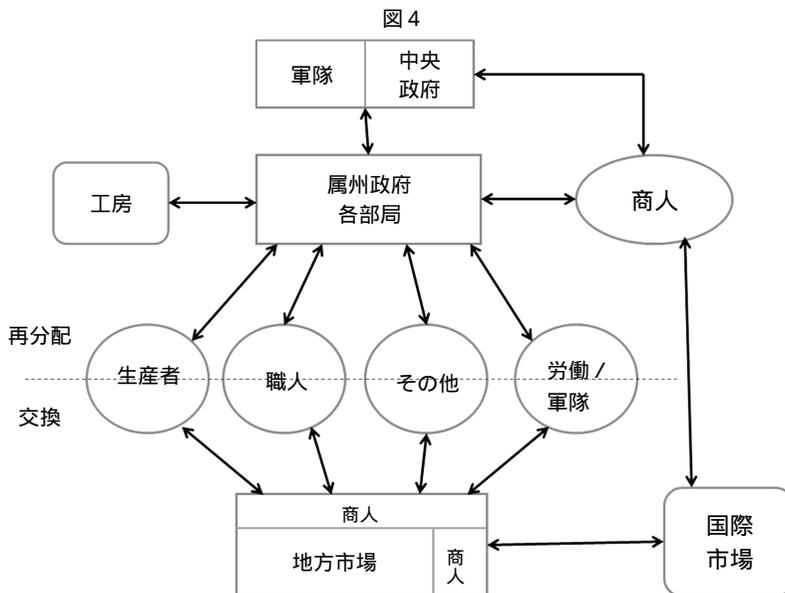
最後に、ウル第三王朝経済の特徴を資金循環の視点から描いてまとめることにしよう。シュタインケラーが特徴づけたウンマ経済における各部門（とくに部局、耕作者、職人、商人などの）の取引を参考に描写すると、各生産者は属州政府から生産物・労働サービスの割当 (quota) を指定され政府の担当部局に納入する一方、報酬として土地（実質は土地収穫量に対応した大麦）ないし大麦、ゴマ油、羊毛などをその地位と職種により給付されていた。ただし、割当物の生産に従事する期間は一年全期間というわけではなく、大体は半年で、残りは自分のために割いていた。したがって、生活に必要な消費財は給付物資の一部ないしは自家生産で産出された生産物を地方市場で売却して調達されたと考えられる。その際、一部の生産者が属州政府に納入する分を銀で納入していたことがあり、商人が介在して生産者がその生産物を市場で売却して銀を収入として獲得していた場合もあったと考えられる。また属州政府自身もその高官や公的経営体の管理者などによって予算上必要とされる物資を企業者（商人）に委託して調達をし、予算と実際が合わない場合に企業者からまたは他の政府高官から借入を行っていた。

属州政府は中央政府にバラ義務を負い、割り当てられた月に負担すべき物資を収集し、中央政府に輸送しなければならなかった。それは帝国の祭祀に供せられる分のみならず、中央政府の支出を賄う分も含まれており、内容は実質上租税負担であった。おそらく中央政府の支出には祭祀、宮廷費用のみならず軍事費も含まれていたと考えられ、帝国防衛のために重要な地点に配された軍団基地の維持にも支出されたと考えられる。他方、軍団基地の指揮官ならびに帝国の外郭に位置する朝貢国からは、貢納分として牛、羊などの家畜等が贈られ

62) Garfinkle (2012: 153)

ていた。もちろん，外国には返礼として贈答物が帝国から送られていたし，また属州政府にはバラ義務の報酬としてブズリシュ・ダガンに集められた家畜が中央政府から贈られることがあった。さらに中央政府や属州政府の管轄下では調達できない物資は，商人を介して国内で生産された毛織物などの物資と交換で入手していた。商人は国際市場にアクセスしてそれら物資を手に入れていたと考えられる。

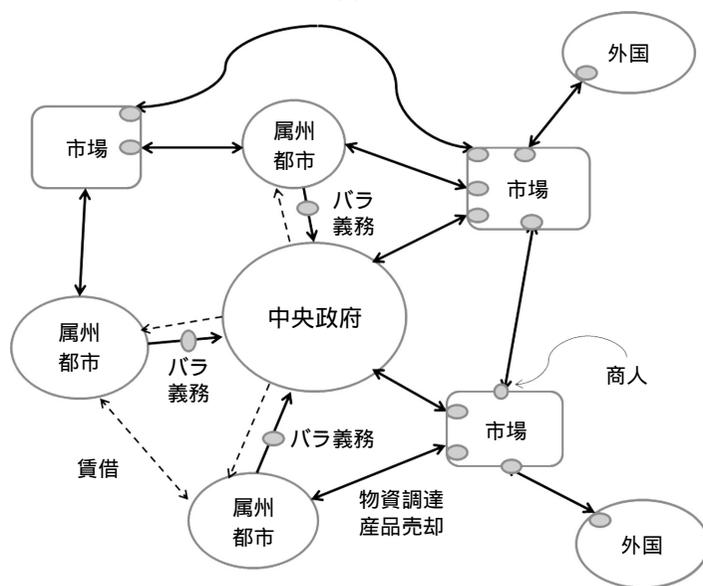
以上のような状況で特徴づけられるウル第三王朝経済を資金循環の視点から描写すると，次の2つの図でまとめられる。図4は属州政府の視点から資金と物資のフローを描いたものである。各生産者（耕作者，職人，羊飼いやその他の生産者，労働者）ならびに工房はそれぞれの割当分の財・サービスを供給し，政府に納入する一方，政府はバラ義務分，給付物資，ならびに自家消費分を支出する。領域内で調達できない物資は商人を介し国内物産を売却して国際市場から調達する。バラ義務分の物資は中央政府へと輸送される。これらの財・サービスの流れは再分配・指令経済の領域を形成する。他方，各生産者は生活消費に必要な分を調達するため，領域内の地方市場に余剰の生産物を供給し，交換によりそれらを手入する。余剰分を供給することにより形成される地方市場は，銀のみならず大麦など商品貨幣もしくは信用を媒体にして交換が成立し，



直接的な交換のみならず商人を介した取引も行われていたと考えられる。すなわち、再分配・指令経済部分と並行するように(または補完するように)市場経済が形成されており、前者だけでは完結しない資金の循環を実現していたのである。

さらに中央政府と属州政府、ならびに軍団基地の関係をみると、図5のように各属州政府と軍団基地からバラ義務と貢納をみたすように物資が中央政府(とくにプズリシュ・ダガンのような再分配センター)に送られる流れがある一方で、中央政府、属州政府、軍団基地それぞれに必要とされる物資(とくに外来品)を調達するため、管轄の領域で納入され、生産された特産物の売却を商人に委託していたわけであり、その取引のため商人たちが集まる国際市場が存在し、交通の要所に各都市を繋げるように形成されていたと考えられる。国際市場とは換言すると委託を受けた各都市の商人たちが集まって取引が行われる交換のネットワークといってよく、その繋がりには帝国内では産出されない物品を産出する周辺外国にまで広がっていたのである。その他に(中央を含めた)属州内ならびに属州間の高官の間で交換ならびに信用供与がなされていたのであり、その分まで含めると、地方からの物資の納入・集積と中央からの支出・拡散という再分配経済と並行するように、市場経済が補完的に存在していたとい

図5



うことであり，その参加者は中央・属州政府と密接にかかわる企業家（商人）たちであり，もっぱら銀を交換媒体にして取引を行っていた⁶³⁾。ただし，その取引の範囲は政府，公的経営体の公的部分に留まらず，官僚，軍人その他地位ある人々が管理する経営主体の私的部分にもかかわっており，国際市場と地方市場が厳密に分離，二分化されていたわけでないと考えられる。実際，属州内で割当分の納入や過大となった労働給付分の返却などは一部銀によって支払われており，交換媒体として銀は属州内部したがって地方市場にも浸透していたと推論されるのである。

4. 古バビロニア時代

紀元前 2004 年にウル第三王朝が崩壊したのち，メソポタミア地方とくに中心地域であるバビロニア地域は，かつての都市国家時代を彷彿させるように有力な都市を中心とした多数の王国に分立し，互いに競う合う時代に入っていく。その中で，南バビロニア（シュメール）ではイシン王国が伸張し，後にはラルサ王国が勢力を伸ばしていった。北バビロニア（アッカド）ではより多くの小国が分立していたが，紀元前 19 世紀になるとバビロン王国が伸張し，次第に北バビロニアで大きな影響力をもつようになっていた。また，ウル第三王朝時代にみられていたことであるが，セム語族系アモリ人（西域のひとびと）がメソポタミア中心域とくに北バビロニアに移住し続け，結果広範囲に展開したセム語族にアッカド語を中心にした書体の文書を使用させ，多くの文書をメソポタミア地域に残させる基盤となっていた。バビロニア地域で王国の統合が進んでいくとともに，西北部ではマリ王国，北部では古アッシリア王国，東部ではエシュヌナ王国，イラン西南部ではエラム王国が割拠する形になっていた。バビロンのハンムラビ王が即位する紀元前 18 世紀初頭には，北バビロニアにはバビロン王国，南にはラルサ王国が分立し，その周辺には上記の諸王国が割拠するという体制ができあがっていた。

63) 属州ならびに中央政府に関わる形で，農産物を銀に交換し，地方産品や交易品を入手し地方当局に手渡す仲介者（ならびに信用供与者）としての役割を商人が果たしており，その後一種の市場が存在していたであろうという議論については，さらに Van Driel (2002: 22-23) を参照されたい。

18世紀半ばにハンムラビ王がエラムを除いたメソポタミア全域を統一すると、旧王国の領域はいわば属州としてバビロン王国(バビロン第一王朝)の下で統治されることになり、政治体制の変更とともに経済システムの内容も変化していった。マリ王国の滅亡によりハンムラビの帝国は、ペルシャ湾からユーフラテス河を通じて東地中海にまで至る広大な交易ルートを確保することになり、そこから得られる膨大な交易の利益を享受することができるようになった。しかし、広大な帝国の統治は、さまざまな軋轢を生み出すことになり、早くも次のサムスイルナ王の治世中に南バビロニアやエシュヌナで反乱が起き、その後南部では「海の国」が自立して、バビロン王国は南部の領土を失ってしまった。またマリ王国の消失によりユーフラテス中流域の交易ルートの安全性が脅かされるようになった。サムスイルナ王時代にその中流域に要塞を設け軍事的な支配権を維持しようとし、またカッシート・ハウスとして知られる外国人傭兵の植民を始めて交易の安全を保障させようとした。しかし、後年彼らは独立して行動するようになり、バビロン王国の統治権と交易ルートを脅かすようになる⁶⁴⁾。北方でもハブル盆地に展開する小王国ないし新興勢力(ミタンニ)と軋轢を繰り返し、アビエシュフ王・アンミディタナ王治世時には北方との奴隷交易が途絶えるまでになった。サムスディタナ王の初期には再度軍事的な威圧を確立しながらも、最終的にはアナトリアに起きた新興勢力(ヒッタイト)が長駆バビロンを陥落させるに及んでバビロン第一王朝は滅亡した⁶⁵⁾。

王国が林立した古バビロニア時代前半は、メソポタミア社会と経済に2つの相反する影響を与えたと考えられる。一方で王国が分立することにより軍事的な緊張を高め、物流などで付加的な経済的負担(コスト)をかけて経済活動に抑制的な影響を与えたことであるが、他方では王国間の競合関係が高まることにより地元の有力者・商人に事業の機会を与え、その収益の一部が王宮だけでなく地元還元されるという好循環を生み出したであろうことである。王国統一後は、全く逆に統一による安全面でのリスク減少が経済活動に好影響を与えたであろうが、反面バビロンに向けた収奪が厳しくなることにより経済的萎縮がみられるようになる⁶⁶⁾。どちらが大きかったかは一概に言えないのであるが、

64) Van Koppen (2007: 212)

65) Van Koppen (2004: 20-23)

66) 相反する影響については Van De Mierop (1992: 247-48) を参照。

経済活動にかかわる文献の分量と多様性の点からみて，発掘のバイアスが存在するとはいえ，古バビロニア時代前半に経済活動が活性化していたことは歪めないようである。

ウル第三王朝時代から古バビロニア時代への展開は，視点をかえることにより断続的なものであったか，連続的なものであったかの違いをもたらす。アダムズによれば，その断続性は私的属性の優位性と国家の関与の後退に表れているという。新しい筆記法の使用は，アッカド帝国，ウル第三王朝時代に現れ始めたが，当時私的性格のひとつとは国家内でほとんど地位がなく影響力をもたなかったが，古バビロニア時代になると彼らは土地売買や紛争に関する文書に関わる形で力を持つようになった。その背景には私的・世俗的な分野で文書の筆記がますます必要になり，記録保存とともに都市社会で書記のニーズが高まってきたことがあげられる。E. ロブソンの研究からこの時期国家支援の書記学校に代わって私的学校による書記の育成が盛んになり，小さな町から主要な都市に至るまで広範囲に分布していたことが窺える⁶⁷⁾。そこで教えられていた数学的知識は，土地の売買，賃貸に関わる紛争を解決するのに参照される土地台帳に正確さが要求されるようになったことを示唆している。国家管理のサークルから異質・雑多な非公式サークルへ意思伝達の分野が拡大していったわけであり，そこでみられる私的（非公的）人の活躍は，私的利益または少なくとも個人的地位上昇をもとめる性向，すなわち個別化（individualization）が顕著になってきたことを反映している⁶⁸⁾。

他方ではウル第三王朝時代の議論でふれたように，すでに商人を含めた私的企業家が存在して公的経営体に関わる事業の委託を受け，官僚，軍人などの階層への貸し付けなどを行っていて，経済運営の点で全面的とはいえないまでも無視できない位置を占めていた。次の古バビロニア時代に入り，王宮の事業の全面的な委託を受けて租税・地代の収集，生産物の管理と販売，その代金の納入などと経済運営上不可欠の役割を果たすようになっていった。企業家・商人の存在感が時代と共に増してきたという違いがあるにしても，ウル第三王朝時代から古バビロニア時代を通じて，彼らの全体経済に対する特有の関係性が一貫してみられる点で，連続していたという主張がみられる⁶⁹⁾。

67) Robson (2008: 86-124)

68) Adams (2009: §5)

いずれにせよ、このような階層の台頭は、家族構造が拡大家族から核家族へと移り、均等相続の原理から土地ならびにその他の資産所有の細分化が見られ、拡大家族によって所有されていた共同土地所有制度の崩壊と、こうした核家族が都市に集住していたという社会構造上の変化、すなわち個別化 (individualization) と都市化の現象を背景に発生してきていた⁷⁰⁾。小土地所有者はその不十分な収入ゆえにより裕福な私的企業者や大組織から借入れを行わざるを得なくなり、返済不能になると土地を売り、家族のメンバーを、最終的には自分自身を売らざるを得なくなった。債務不履行により土地所有の集中化が進行し、多くのひとびとが土地所有から締め出される社会に向かうことになった。これは、政権を支える人的基盤が崩されていくことを意味し、これを防ぐための旧態回復の法令 (šimdat šarim/mišaram šakanum 後には mišarum)、つまり本来の所有者に回復させる機会や債務奴隷の解放などが不規則な形ながらも頻繁に出されていたのである⁷¹⁾。

ところで先に述べたように、古バビロニア前期の王国分立時代の政治的状況は地元の有力者(企業家, 商人)に事業の機会を与え、王国の独立性は他国からの収奪を防いで地元への利益還元をもたらしていた面がある一方で、国家分立の体制は政治的対立による安全保障上のリスク増大と流通ルートへの関税賦課などからくるコスト増大により経済活動を全体的に抑制してしまう。それにもかかわらず、前期の全般の経済状況は後期(バビロン王朝時代)より活発であったかの印象を与えている。

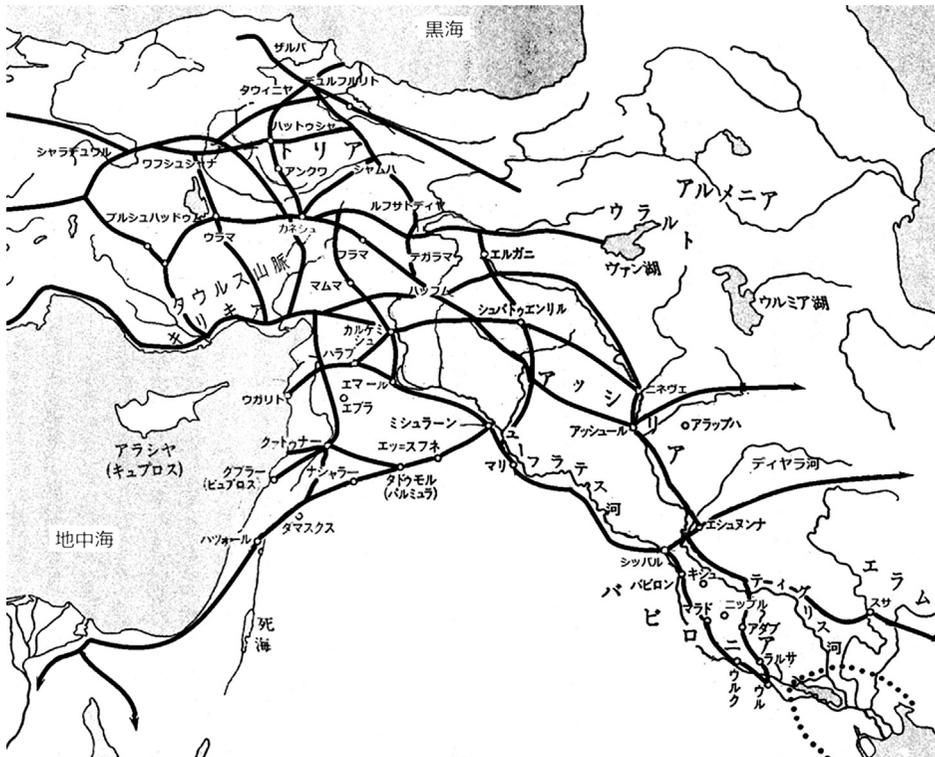
その前期に注目すると、各王国の首都ないし拠点となった主要都市の間では、さまざまな商品が交易されていた。ハムラビ王の統一直前まで、例えばディヤラ河地域の中心にあるエシュヌナは交易の拠点都市として栄えていた。隣国エラムとの間では、錫が輸入され代わりに銀が支払われていた。その錫はエラムの後背地ないし中央アジアから産出されたものが輸送され交易されていたようであり、それは北のアッシュールや西のシッパル経由マリへと再輸出された。その交換にアッシュールからは奴隷や銀が、マリからはワインなどが交易されていた。南西に位置するバビロニアには、中継都市シッパルを通して、錫、奴

69) Garfinkle (2012: 147-48)

70) Goodeeris (2002: 373-78)

71) Goddeeris (2002: 326-330, 335-36)

図 6



資料) Klengel (1983 : 訳 96-97), Barjamovic (2011: Map 7) を参考に作成

隷，銀が輸入され，代わりにバビロニア産の農産物や織物が輸出されていた。これらは交易上の主要品であるが，アッシュールには織物も輸出されていたように，そのほかにも多くの商品が交易されていた⁷²⁾。

ちなみに，アッシュールでは奴隷は北方地方から入手されており，金銀ならびに銅はアナトリアから交易によってもたらされていた。バビロニアについては，輸出品として大麦，ゴマ油などの農産物，織物以外に皮革製品や塗料などがあり，輸入品としては上記の商品以外に銅，象牙，石，材木，木工品，ワイン，オリーブ油，馬などが輸入され，その一部は南方のディルムン(パーレーン)やマガン(オマーン)から輸入され，一部は北シリアからマリを經由してもたらされたものであった⁷³⁾。実際，マリ自体も中継地として銅をキュプロスから，材木や香料，ワイン，馬，穀物などを北シリアから入手していたのである⁷⁴⁾。

72) 川崎 (2000)

73) Leemans(1960:120-29)

a) 古アッシリア商人と交易

古アッシリア交易に注目すると、アッシュール市とアナトリアの 30 もの商業居留地とくにカネシュとの間で紀元前 20 世紀から 18 世紀にかけて (1950-1720BC) 交易が盛んにおこなわれていたことが、トルコのキュルテペ (カネシュ) 出土の 23,000 もの粘土板文書からわかってきた⁷⁵⁾。アナトリアへ錫、織物を輸出し、そこでの交易の利益により金、銀を獲得して、銀をもってさらなる錫、織物の購入にあてていた。アナトリアにはカネシュに中心的商館があり、古アッシリア商人たちはアッシュールとの交易以外にも、そこを拠点にしてアナトリア各地で交易活動を営み、利益を拡大していた。例えば、東南部の現地で羊毛を買い付け北方の別の土地で銅と引き換えに売却し、その銅を西部に持って行って再び羊毛に換えて、最終的により多くの銀に交換するという三角貿易に似た商業活動を行っていた。アッシュールから錫や毛織物をアナトリアで売却するだけでなく、現地の産物の価格差を利用して利益を増殖させたうえで、現地では安価な銀をアッシュールに送っていたのである⁷⁶⁾。

そのアッシュールであるが、都市はちょうどチグリス河中流域にあって、周辺の主要な物資の産出地とくにアナトリアとの交易の中継地にあつたため、交易 (中継貿易) の利益を得るのに優位性があつた。交易については市集会 (ālum) と市役所 (bēt ālim) ならびに神殿が関与していた。市集会は都市国家の政治的枠組みを確定し、交易や商人に関わる方策を決定していた。外国の支配者との宣誓協定を締結することによりアッシュール商人の通行の便宜などもはかつていた。市役所は外部からアッシュールに来る輸入品を購入し、商品を商人たちに売却するセンターであり、信用供与や資金借入れが行われる銀行のような存在でもあり、関税やその他の料金が課せられる場でもあつた。ちなみに国王は市集会の議長として行動していた⁷⁷⁾。

古アッシリアの交易は、基本的に私的事業であり、交易に責任をもつ商人 (tamkārum) とその代理人 (šmallūm) などから成る家族企業により実施され、その資金はほかの市民 (商人) や神殿などの投資家 (ummeānum) によって投資さ

74) Klengel (1983: 訳 102-103)

75) Veenhof and Eidem (2008: 41, 46)

76) Lassen (2010: 170-74)

77) Dercksen (2000: 136-37)

れていた。資金は投資家から共同出資という形で集められ，一定期間事業（キャラバンによる交易）を行い，その得られた利益は出資額に応じて分配されるというパートナーシップ契約（*naruqqum-contract*）が当事者間で結ばれていた。キャラバンを組んで交易を実際行う組織（*ellutum*）は「商品の共同輸送のための組織的形態」（Dercksen 2004: 167）といてよく，その名称には取引リーダーまたは主催者の名が付されていた⁷⁸⁾。パートナー契約で集められた資金（基金）が代理人に渡され，交易の事業ごとに利益が計上されてその利益は代理人と投資家分に分けられ，投資家分は再投資されていた⁷⁹⁾。基金の下で交易事業は継続して行われ，一定期間ごとに利益が配分されて投資家分の利益は本国アッシュールに送られていた。償還前に資金を引き上げる場合の条項もその契約には盛り込まれていた。さらにその権利（株式）が譲渡，ないし相続の対象にもなり，また債務の株式転換も実質上認められていたことも書簡や訴訟文書からうかがえる⁸⁰⁾。長期的なパートナーシップと対応したルール形成が古アッシリア交易には成立していたのである⁸¹⁾。この他にも多数の商人が資金を出し合って，一人の商人に事業（買付）を委託して，その買い付け品または利益を出資額に応じて分配する，バビロニアにおけるパートナーシップ契約（*tappûtum*）に似た契約もアッシリア商人の間で取り交わされていた。アナトリアの羊毛買い付けではこのような事業ごとの契約が結ばれて，羊毛の大量買い付けとその分配が行われていたのである⁸²⁾。

アナトリアやシリアには 30 ものアッシリア商人たちの商館または商業共同体（*kārum*），商業居留地（*wabartum*）が存在していた。とくにキュルテペで発掘されたカネシュの商館が有名であるが，中心的な *kārum* は植民地の自治政府と一種の商業会議所の役割を果たしており，アッシュール市との関係を背景に，在地の支配者や都市国家との政治的経済的関係を維持し，交易協定に盛り込まれた相互の権利と義務の遂行を確認し保持する存在でもあった⁸³⁾。この共同体

78) Dercksen (1999: 93-94)

79) Larsen (1977: 132-36)

80) Larsen (1977: 129-32, 139-40)

81) Veenhof (1997: 345) ラルセンは *naruqqum* を商社 (commercial company) に近いものと述べている。Larsen (1977: 144)

82) Lassen (2010: 162-63)

83) Dercksen (2004)

組織は、インフォーマルには家族的關係や事業契約下にある交易者たちの私的な友情關係、パートナーシップ、代表と代理人關係から成り立っており、そのネットワークは在地の多くの都市、集落に広がっていた。そこから得られる市場に関する情報、通信運輸の効率的な方法、貯蔵施設、信賴のおける人材、そして在地の王宮と接觸可能な自治政府支局の存在などは、交易の進展に極めて重要な役割を果たし、従来の交易活動にない新しい可能性を与えるものであった⁸⁴⁾。

企業家や商人が事業・交易を遂行する場合、取引上信用供与を受けるまたは借入を行なうことが多くなる。また信用売りもかなり多く、地方の王宮や役人への販売や商館を介し商人たちが参加する共同作業に信用売りが存在していた。非常に多かったのは、商人 (tamkārūm) に委託して少量の商品を委託販売するケースである。彼らは委託販売の商品を受け取って債権者(商人)の代理人(エージェント)として行動する代わりに、銀建ての債務額と支払期限、期限超過分には利子負担を書いた債務証書に署名した。結果、商人たちは大量の債券、債務証書を抱え、保管することになり、債務の回収を図らなければならなくなった。さらに、期限内に債務を返済できないケースが出てくるわけであり、債務履行のための種々の手続きが遠距離交易商人たちの社会では整備される必要が生じてくる。そのため担保や保証人、または延滞金(付加的利子負担)などが契約上に盛り込まれたりした。メソポタミアの法体系では、債務者を召喚し身柄を拘束するまたはその代理人を立てることができ、未払いや支払い拒否の債務者には証人の前で尋問されて、その証言は記録され証拠として保全された。古アッシリア法体系ではさらに債権者に商館 kārūm の権限を借りて債権者の自己負担のもとに商人による債務の強制的移転などを求めることができた⁸⁵⁾。商館は尋問や交渉のために関係者を出廷させ、関係記録文書の証言部分を精査する命令を発することができた⁸⁶⁾。

負債の証拠は、証言や(原本の債券、宣誓証書、合意書、判決文など)文書で提出させられた。そこにはメソポタミア特有の記述と簿記のスキルが重要な役割を果たしていたわけであるが、古アッシリア商人たちはこれらを私的企業者や

84) Veenhof (1997: 341)

85) Larsen (1996: 256ff)

86) Veenhof (1997: 348-49)

遠距離交易者に応用したのである。「タブレット」と呼ばれる債務者により封印された債券が債権者の手元にあり，返済が行われれば返還されるのであるが，それが手元がない場合は基本的事項を記したコピーが予め作られて送付されて，パートナーまたは代理人がこれをもとに返済を要求していたことが分かっている⁸⁷⁾。商人もこの事項を参考に証言することが多かったと思われ，これをもとに債務の支払いや調停なども行われていた。債権者が原本の債券を戻すことができない場合は，代わりに封印した債務免除証書を発行したであろうし，原本が戻った場合はそれと交換して，債務関係は清算されたようである。

さらに，債務者がすでに代替物で返済した，または代理人に支払ったとか，共同債務での返済義務が生じた，または保証人に債務が転嫁されたときなど，債務履行の問題が複雑化した場合などのトラブルを避けるため，債権者と債務者の間で公式契約が結ばれ，不当な根拠で要求された支払いは返還される，正当な支払い分が拒否された場合は二倍に支払うなどの合意事項が盛り込まれていた⁸⁸⁾。デフォルト債務者の問題は，伝統的な担保，保証人，罰則的利子負担の条項を組み込んだ契約で対応していたのであるが，古アッシリア商人たちは加えて効果的な対応策を導入し，期限内に債務が支払わなければ，金貸しにその分を債務者の勘定で利子つき銀借り入れを行うとの条項を盛り込んだのである。それも商館のルールで年利 30% の金利で借りることになり，債務者は二重の利子を負担することになった。この条項は保証人にも適応され，このような法律が古アッシリア市集会の下で正当化されていたのである⁸⁹⁾。

商人 (tamkārum) が保有した債券・債務証書は，比較的小さな金額で，債権者の名義が単に tamkārum と書かれて匿名であるものが多くあった。このような債券は交易者間で普通に譲渡されており，いわば小切手として機能していた。債務者はこの債券の保有者に債務の支払いを行うわけで，このような債権の移転は金額自体が小さく，かつ相互に知り合いの関係であるような状況で可能になったと考えられ，また単なる債権回収だけでなく，債権の売却によって現金化のニーズを充たされるわけで，この点でも商人たちの間で受け入れられていたのであろう⁹⁰⁾。このような債権の譲渡化は古アッシリアではいち早く紀元

87) Veenhof (1985)

88) Veenhof (1991: 441, n. 13), Veenhof (1997: 350)

89) Veenhof (1997: 349-51)

前19世紀から導入されていた。古バビロニアでは「所持者条項」の伴った債務証書の出現は百年遅く紀元前18世紀にみられ、債権者の名前は明記され、匿名名義 *tamkārum* は使われなかった。それら債務証書は王宮や公共経営体(神殿)がらみで発行されており、例えば王宮から羊毛を受け取った取引者に対して、所持者条項付の債務証書(タブレット)が発行され、取引者はそのタブレット所持者である「王宮の使者」に対し、対応する銀を支払わなければならなかった。また公的経営体の高官により銀が旅行商人に与えられ、交易が終わって帰国したのち、タブレット所持者に支払いが行われることが契約の条項に書かれることもあった。また別の記録では、タブレット所持者は地方レベル又は遠距離の私的交易の関わりで現れることが記載されている。所持者条項の書かれたタブレットが取引関係者の間で移転され、所持者はメソポタミア都市の *kārum* がある港や商業地区で債務者と出会い、支払いが行われていたのであり、そのような債権の譲渡と債務の履行・清算が容易に実施されていた⁹¹⁾。

ところで、活発な交易活動が記録されていたカネシュの *kārum* は、紀元前19世紀後半になるとアナトリアでの軍事的衝突により破壊され、その後商業活動は低迷したようである。しかし、シャムシ=アダド治世時になるとアッシュールとカネシュとの商業関係は再構築され、商業活動は復活することになる。その後バビロンのハンムラビ王によりアッシリア地域は統合されるが、商業都市としてのアッシュールは健在であり、その制度・組織は一世紀前と同じで交易は重要なままであった。しかし、サムスイルナ王治世時に起きたアナトリアでの政治的紛争と戦争によりカネシュの *kārum* は紀元前18世紀末までには破壊され、バビロン王国の北方への軍事的圧力やキャラバン・ルートの安全性の喪失なども加わって、古アッシリアの商業活動は低迷、衰退を余儀なくされたようである⁹²⁾。

b) 古バビロニア前期の経済と交易

古アッシリア交易とその先駆的(「近代的」ともいえる)革新的制度、とくに前節でとりあげられたような譲渡可能な債務証書(小切手)は、ヴェーンホフ

90) Veenhof (1997: 358)

91) Veenhof (1997: 360-61)

92) Veenhof and Eidem (2008: 143-46)

(Veenhof, 1997: 363) によれば古バビロニアのものより 100 年ほど早く成立していたとされるが，交易に関わる様々な制度的枠組みは，商業都市間の交流と競争により，おそらく急速に伝播し模倣されていったと考えられる。バビロニア固有の経済的事情も加味して独自性を保ちながら，バビロニアにおいて交易に関わる諸制度は整備，発展していったのであろう。この脈絡でアッシュールに対比しうるバビロニアの商業都市をとりあげるとすれば，北バビロニアのシッパルがあげられる。バビロニア北端で四方からの中継点に位置するシッパルの商人共同体 (kārum) は，ユーフラテス河中流域の少なくとも 2 つの都市 (マリ，ミシュラン) に植民しており，他の地域 (エシュヌンナやアッシュール，バビロニア諸都市) にも交易拠点をもうけて交易ネットワークを形成していた。シッパルの交易共同体は経済的ニーズを国家 (王宮) の利益に密接に結びつけており，国家は重要な資本提供者であって，商人は国家と契約関係にあった。もちろん，商人は私的商業にも関与し，自身だけでなく他人からも資金を集めて事業を行っていた⁹³⁾。

この時期 (古バビロニア前期)，バビロニアの諸王国はウル第三王朝時代以上に，ただし間接的な形で経済的潜在力を向上させることに関与するようになっていた。王国 (王宮) は事業の管理運営のため労働力を恒常的に保持することを避け，家畜の飼育，直営地の耕作，生産物の売却，租税・地代の回収，季節労働者の調達などの経済的活動上のリスクを負担して利益を獲得することができる私的個人，つまり企業家に王室の事業部門を委託する方向に変わっていった。これら王室事業 (palastgeschäfte) に関する記述は，ハンムラビ王治世時からかなりの程度で見られるようになるが，それ以前の古バビロニア前期においても，文書数ははるかに少ないが北バビロニアにおける王室事業は一般に考えられているより頻繁に行われていた。もっとも王室の規模がまだ小さく，事業から得られる農産物余剰ははるかに小さかったため，私的個人 (企業家) はかならずしも王室と結びついていなかった⁹⁴⁾。

以下例として古バビロニア前期に商業都市シッパルで活動していた商業組織 (TIM VII) をとりあげるが，この組織はいくつかの重要な家族によって共同で運営されており，長距離交易，借地農，大規模建築事業，金属製品，皮革製品，

93) Veenhof (1997: 340-41), Harris (1975: 261-65)

94) Goddeeris (2002: 347)

羊毛加工，織物，そのほか魚，葦，塩，レンガ・陶器など各種産物，そして信用事業などを扱っていた。長距離交易ではバビロニア産織物をアッシュール経由で金や銀と交換し，そのほか大量の金属（銅，鉛，青銅など）を周辺地域から交易で輸入していた。これら交易事業は組織内の商人により彼自身の責任で行われていたが，それ以外にもパートナーシップ契約で，組織外の商人も含めて商人たちが資金を投資して組織の事業が行われていた。また，商業目的で大量の銀が組織内部で管理されていたことがわかっており，内部統制の一端を窺わせる。この組織以外にも，大量の金属ならびに銀がシッパルの中央建物の遺跡から発見されて，貸付やリース契約が行われており，シッパルの独立した市民が商業パートナーを組んで経済活動に参加していたことを窺わせている⁹⁵⁾。

このほかに商業・企業ローンをみていくと，商品を引き渡す前に銀や大麦を受領して後に商品を引き渡すという「信用買い」の形態や，同じ組織内のメンバーで信用売りをを行う場合とか，さらには身内に資金（銀）を貸付して農業事業を行い，収穫した農産物の売却から返済するなど，一種の投資事業に似たケースもみられる。いわゆる共同事業に関する案件も含まれていたわけで，商業的貸付の一部はパートナーシップ契約に属するとも解釈されている⁹⁶⁾。そのなかにはシャマシュ神殿の修道女 *nadiatum* の家族メンバーも含まれ，商業的共同事業が確認されており，修道女自身も交易に関与していた⁹⁷⁾。

古バビロニア前期社会において，銀や大麦は貨幣として広範囲に使用されていた。とくに大麦は農産物（商品）であるが，安価な貨幣（交換媒体）として一般に受け入れられていた。実物資産（土地）や労働はともかく，農産物や非農産物は自由に売買され，輸入素材（金属，高級石）も需給の動きに従って価値が変動していた。労働については賃金や穀物給付などが労働の需要と反応して動くことは少なかったが，王室事業やほかの組織のために労働力の調達を行っていた仲介者 (*iššaku*) は労働不足を利用して利益を得ていた。このように需要と供給の関係で価格が変動するという意味合いで，市場原理は古バビロニア前期の社会において多くの分野で重要な役割を果たしていた⁹⁸⁾。

95) Goddeeris (2002: 369)

96) Goddeeris (2002: 388-89)

97) Goddeeris (2002: 136), Harris (1975: 264-65)

98) Goddeeris (2002: 384-85)

さらに何よりもバビロニアにおいては，農産物（とくに大麦）が投資対象として人気があり，ほかに牛，ヒツジなど家畜，羊毛，乳製品などの動物性製品にも投資が行われていた。消費，商業ローンの発行は，生産手段の増加を含んでおり，投資と解釈してよく，その資本は社会的宗教的目的にも使われていた。先に挙げたシッパルの商業組織の利益の多くは，祭祀や外交的負担にも使われていたようである。公私境界の曖昧さに関しては，「企業，消費ローン双方を供与し，労働を供給する社会的機能，神殿への寄付というイデオロギ的機能，そして公共事業を通じた土地改良のどれが本質かは正確に定めがたいが，それらは経済的上位を確立するために著しい役割を果たしていたに違いない」というゴッデーリスの言葉が印象的である⁹⁹⁾。神殿のような大組織とはいえない家族メンバーを超える程度の私的経営主体であっても，大組織と同様に農業が所得の主要源泉であり，かれらはローン供与や商業活動にその余剰を投資していたのである¹⁰⁰⁾。

さて古アッシリアでは商人が多くの投資家から資金を集め，代理人（旅行商人）を雇って事業を継続的におこなうという特有のパートナーシップ契約がみられたわけであるが，その古アッシリア交易時代（カネシュ 期）の最後2世代と同時期に，古バビロニアでもパートナーシップ契約がみられてくる¹⁰¹⁾。ただ，その契約の対象は単一の事業に向けられており，投資家も原則一人（または二人）であった。とくに海外交易や農業事業に向けられたパートナーシップ契約（tappātu-contract）が有名であり，例えばペルシャ湾をまたがったディルムン（パーレーン）向け交易がウル商人の間でパートナーシップ契約として結ばれ行われていたことが知られている¹⁰²⁾。海外交易という極めてリスクの高い事業が対象となる場合，投資家は一回限りの事業にして，他の機会と合わせて分散投資をしていたと考えられ，継続的な基金形式で海外交易に対し投資を続けるという発想法はなかったのかもしれない。これは，同一の事業に対し投資家を多く集めて分散投資を行っていた古アッシリアパートナーシップ契約（naruqqum contract）と対照的であり，古アッシリアでは本国都市と植民地との安

99) Goddeeris (2002: 396)

100) Goddeeris (2002: 397)

101) Veenhof (1997: 344)

102) Oppenheim (1954: 6-17), Leemans (1960: ch. 2)

定的な関係とリスクを軽減する組織的な取り組みが組織的な基金形態を生み出したのであろう¹⁰³⁾。逆に古バビロニアでは投資面で多数の参加と事業の継続性を担保する組織的枠組みが、シッパルのような商業組織の存在は確認できるにしても、不十分であったということかもしれない。

次に南バビロニアとくにウル、ラルサに目を向けて、ハンムラビ王以前の国家統治が王宮を中心にした経済活動にどのような変化をもたらしたかに注目していこう。第三王朝時代首都でもあったウルは、古バビロニア時代になると最初はイシンの統治下に、19世紀後半になるとラルサ王国の下に、そして18世紀半ばハムラビ王治世時にはバビロンの統治下にはいつていった。このような統治上の変遷の中で、ウル地域は北バビロニア諸都市と同様に個別化の趨勢のなかで社会経済の変容をとげていった。

ウル第三王朝時代、ウル地域では神殿(ナンナ、ニンガル)が土地、牧草地、湿地帯の主要所有者であり、その所属員はその管理を行う責任があったが、実際の作業は借地や委託などを通じて私的市民により行われていた。神殿などの公的経営体はそれら関与する従属民のケアと扶持を自らの負担で行わなければならなかった。紀元前20世紀になると、イシン王宮事業の従事者は、ウル第三王朝王宮のようなフルタイムの雇用から変わり、パートタイムで働くようになっており、残りの時間は自分自身のために働いていた。公的経営体(神殿)は労働者の日常支援上の責任は減じて、肉体労働については私的市民と契約を交わしていた。例えば、家畜飼育の場合では飼育者に家畜が割り当てられ、毎年家畜数の管理と羊毛の手渡し量が決められていた。飼育者は自己の家畜と合わせて管理をし、最善の成果をもとめられ、定額の実物もしくは銀価値額相当のものの納付が義務付けられていた。これにより神殿の所得が保障されることになった¹⁰⁴⁾。

1830年代ラルサのワラド・シン時代になると状況は変化した。ウル市にある大倉庫の機能は食糧品の貯蔵でなく、銀や貴重品の貯蔵となり、管理センターとしての機能は失われていった。私的市民の文書が大幅に増え、神殿の資産管理、資源開発に重要な役割を果たすようになった。神殿職はそれまでフルタイムの職であったが、分割されるようになり、いわば財産とみなされて、取引、

103) Larsen (1977: 144-45)

104) Van De Mierop (1992: 242-43)

貸出，相続の対象になっていった。神殿の食糧供給や財産管理も私的企業者に委託するようになり，その際神殿は実物より銀による支払いを要求するようになった。私的企業者は神殿資産の利用を認められたひとびとから地代などを回収する権利を与えられ，神殿の金庫むけにそれら産物を銀に換えることも認められた。結果私的企業者はウル地域の経済において重要な役割を果たし繁栄した。しかし，リム・シン治世中期になると，ウルからラルサに地域管轄が移転し，経済的事業の直接管理を行うようになり，ウルの企業家たちはしだいに事業からはずされていったようである。交易でも同様の変遷があり，紀元前3千年紀末から交易は私的商人により行われ，紀元前2千年初期にニンガル神殿は輸入品の十分の一税の徴収を商人に任せていたが，ワラド・シン時代になると，神殿はその管理責任を奪われ，ラルサ王宮が直接管理を行うようになった。これは覇権時代にはいつて武器に必要な銅を交易により入手しようとしたからである。このことからミアロープは，主要な経済活動の担い手はウル市民からラルサ市民に替わっていったと考えている¹⁰⁵⁾。

c) 古バビロニア後期：統一国家と経済活動

ラルサに代わってバビロンのハンムラビ王による南バビロニア支配が始まると，バビロンの王宮が代わって全体の統治をおこない，ラルサに国王代理においてラルサ，ウルなどの南バビロニア地域を管轄することになった。国内統治を補完させるため，商人共同体を介して商人たちを組織的に使い，王宮に必要な経済活動に従事させていた。商人共同体(kārum；商館)は，商人長(UGULA DAM. GÀR)を筆頭に3層構造になっており，商人長は実物の租税・地代の回収，その売却の権利が与えられ，銀や大麦で王宮に納付するという義務が課せられていた。(ラルサならびにウルの)商人長は，王宮よりバビロン向けの指定された産物の運搬ならびに産物の市場売却によって得られた銀の運搬全般の責任も負っていた。商人長の下には，5人組の責任者(UGULA NAM.5)と呼ばれる上級商人たちがいた。商人長の仲介をうけて，上級商人たちは王宮の産物を受け取り，自身で売却をせず，地方商人たちに提供した。すなわち，実際物産を売却するのは地方商人たちであり，結果的に王宮に対する支払い義務を負うことになる。ただし，最終的に納付義務を負うのは商人長たちであり，そのた

105) Van De Mierop (1992: 243-45)

めに彼らは地方商人たちの納付が遅れた場合などは、王宮の要請により彼らが立て替えて納入せざるを得なかった¹⁰⁶⁾。

地方商人は、商館の仲介をうけて物産を受け取るわけであるが、例としてサムスイルナ王の時代にある地方商人は商館の仲介により上級商人から羊毛、亀、ナツメヤシ、玉ねぎ類で構成された物産を受け取っており、その商品評価額の3分の1の銀を王宮に納める義務を負うことになった。大体、地方商人たちは王宮から受け取った産物の評価額の3分の1の金額を納入したようであり、このことは変動があるとはいえ、市場価格で評価額に近い形で売却が実現したときは、王宮納入額を差し引いて3分の2の粗収入が計上されることになる。結果、物産の運送費や売却のための代理人への手数料、さらに商館への手数料などを差し引いた金額が純利益となったであろう。王宮に対しては定額の銀納付が要求されていたわけであり、商人たちはリスクをとってこの支払義務をみたしたわけである。王宮側にとっては、銀により納付されることにより流動性を確保したわけであり、このような業務を遂行するには市場へのアクセスが可能な商人を使うしかなかった¹⁰⁷⁾。

いわゆる「王室事業」を商人(または私的企業家)に委託するという体制は、古バビロニア前期において主要王国において観察されており、バビロニア統一後の統治体制は、より大規模に組織化して各地域の商人共同体(kārum)を王国内に組み込んだということであろう。また統一による王領地の大幅な増加は、さらに銀納付の確保とバビロンへの送付というニーズを大規模に満たす必要があったわけであり、その分さらに商人共同体の組み入れは不可避であり、組織下に組み込まれた地方商人たちはますます王室事業に依存度を高めていったに違いない¹⁰⁸⁾。しかしながら、王宮と商人共同体(karum)との関係は変わらず、先に述べたような関係を維持していたように思われる。つまり、商人共同体は都市の商人によって構成される自治組織であり、王国の領域が変化しても王領地で産出された産物の売却に向けて照会するところであって、王国の行政機構に組み込まれた官僚組織ではなかったということである¹⁰⁹⁾。商人共同体はそ

106) Stol (1982), Klengel (1978: 訳151)

107) Stol (1982:), Rede (2005: 140-41), Postgate (19992: 198-99), Van De Mieroop (2002: 168)

108) Klengel (1978: 訳152-53)

109) Kolinski (2010: 83)

の構成員の地位の高さから，都市の自治的な行政機関ならびに裁判所（または裁判所のメンバー）としての機能を果たしていたようであり，王宮からの命令，指示の受け手となり，行政機関としての立場から徴税，送金，公共事業への賦役者の選出などを執行していた¹¹⁰⁾。

王国と商人共同体との関係は，サムスイルナ王以後も同様に続いていた。ただし，サムスイルナ王の治世後半に南バビロニア地域の反乱があり，以降バビロン王国の影響力は南部では低下し，領国は縮小を余儀なくされていった。それに呼応するように，紀元前 18 世紀のハンムラビ，サムスイルナ時代では王室事業の対象物産が羊毛，魚，なつめやし，野菜類であったのが，17 世紀になると対象物は羊毛，牛，ゴマになっていた。これは，南部を喪失してその特産物である魚や野菜類の調達が困難になったことがあげられる。また，商人共同体 (kārum) は統一直後では商人長 上級商人 地方商人の 3 層構造であったのに対し，17 世紀になると上級商人の階層がなくなり，地方商人に対し責任を負うのは商人長しかなかった。取り扱う商品は，18 世紀では商館の仲介によりラルサ，ウルなどで受け取られて近隣の都市で地方商人により売却され，それぞれの商人長はそれら代金をバビロンに送り届けたのであるが，17 世紀になると商品はバビロンに直接届けられ，地方商人たちはそれらをそれぞれの都市で売りさばいたのである。つまり，バビロンにおいて，さまざまな都市の商人たちが売りさばく必要のある羊毛，牛，ゴマといった商品を求めに来たわけである。このような変化は，明らかにバビロン王国の領域がもとの北部に縮小し，取り扱う商品が限定され，対応して商人のネットワークもその分縮小したことによっている。商人組織の二層化はこのような事情に対応していたのである¹¹¹⁾。

このようなバビロン王国の縮小とともにバビロニアにおける交易活動も停滞化したのであろうか。このことについては文献の制約もあり，必ずしも確たることがいえない。古バビロニアの限られた情報から，各種の価格の動向を見ていくと，おおまかな趨勢としてハンムラビ王，サムスイルナ王治世時にむけて価格は低下する傾向にあり，サムスイルナ王末期から次のアビエシュフ王治世になると価格，賃金（銀建て）ともに大きく上昇しており，その後のアンミデ

110) Kraus (1982: 35-40), Stol (2004: 896), Michel (1996: 416-17)

111) Charpin (1982: 60)

イタナ王, アンミサドゥクァ王時代になると物価・賃金ともに低下し, 最後の王サムスディタナ王になって再び上昇傾向になる¹¹²⁾。土地価格(シッパル)は逆にアビエシュフ王時代に低下し最低になっている。交易活動に関係するものとしては奴隷価格の動向があげられ, その動きはほかの価格と同じくハンムラビ以前からのサムスイルナ初期までの低下傾向にあったが, その後転じてアビエシュフ王治世に最高値をつけ, その後奴隷価格は徐々に低下し, アンミサドゥクァ王時代の最初の十年間で最低レベルまで低下している。その後上昇に転じサムスディタナ王治世半ばに奴隷交易が進展し価格が下落傾向にあったことが不十分ながら窺えるという¹¹³⁾。

アビエシュフ治世時の価格の高騰と土地価格の低下は, サムスイルナ王時代に発生した各地における反乱とその鎮圧, その末期における王国の領土縮小に大きく関係していたと思われる。反乱は灌漑施設にも損害を与え, 経済的危機を引き起こして中部・南部の都市の衰退(脱都市化)を招いたようであり, 南部地域(海の王国)の独立により領土が縮小した結果, 北バビロニアへの物産の供給が低下したことや, 洪水, 河川の流路変更や灌漑施設のダメージなどにより地力が低下したことが物価の高騰と地価の低下を招いたと推定される¹¹⁴⁾。それに対し, 交易に関係する奴隷価格が同じような動向を示していたことは興味深い。コッペンによれば奴隷価格の動きは供給条件に影響され, 奴隷供給源である北方地域との通商関係に左右されていた。価格低下は戦争捕虜などの供給が増加したことを示唆し, ハンムラビ王時代の領土拡張は供給増加を促したのであり, サムスイルナ王以降の価格の急上昇は奴隷交易の制限によっている。アンミサドゥクァ王初期にエシュヌナやエラムからの奴隷が流入しており, 治世を通して北方からの奴隷供給は途絶えた状態に対し, ザグロス山脈裾野が代替供給源になっていた。北方からの奴隷交易再開はサムディタナ王即位 10 年後次の 10 年間に於いてであった¹¹⁵⁾。アンミサドゥクァとサムスディタナの治世時にテルカ(ユーフラテス河中流域の都市)が両王によって直接支配されていたようであり, これが事実ならこの時期のバビロン第一王朝の支配領域が考

112) Farber (1978: Graphs 12, 13, 14)

113) Van Koppen (2004: 17), さらに Farber (1978: 12-14)

114) Stone (1977: 270), Gasche (1989: 139-40)

115) Van Koppen (2004: 17-19)

えられている以上に広域であったことを示唆する¹¹⁶⁾。奴隷交易の再開はこのような軍事的プレゼンスを反映したものと見える。総じて、サムスイルナ王以降バビロン王国は周辺地域との軋轢を再度引き起こし、ハムラビ以前の状態に戻った感があるが、チグリス・ユーフラテス河中流域までの影響力は保持していたようである。その点から地域による交易制限があったとはいえ、商人たちの交易活動は維持されていたのではなかろうか。ただし、その制限の背景にはカッシートとの軋轢、北方地域ならびにアナトリアでの政治的変動があり、そのひとつであるヒッタイトの台頭がバビロン第一王朝の滅亡（バビロン陥落）につながっていた¹¹⁷⁾。

d) 国家，市場，商人共同体 (karum)

古バビロニア時代の交易の構造は、紀元前4千年紀（ウルク期）、3千年紀（初期王朝期、アッカド帝国・ウル第三王朝時代）と基本的に変わっていない。豊かな農業地域であるバビロニアは農産物、毛織物に優位性があり、それらを輸出してバビロニアでは産出されない原材料となる鉱物資源や木材、その他産物を輸入するという体制は構造的に変わっていなかった。具体的には大麦などの穀物、ゴマ・ゴマ油、羊毛、毛織物、皮革、塗料などを輸出して、鉱物（金、銀、銅、錫）や奴隷、木材、石材、宝石、蜂蜜、ワイン、オリーブ油、その他の産物など多様な産物を輸入していた。錫についてはエラム、エシュヌナを経由して輸入され、マリ、エマール方面に再輸出されていた。銀という貨幣としてメソポタミアならびに周辺地域に広く使用された素材は、銀が産出されないバビロニアへはおそらく一貫して流入して、地域内の交易を容易にし、そのための流動性を確保するほどのストック量になっていたと考えられる¹¹⁸⁾。このことは、換言すると銀を除いたバビロニアの貿易収支（移転収支を含めて）がある期間黒字基調であり、黒字分を銀流入で埋め合わせていたことを意味する。銀の主要産地と推定されているアナトリア地方または中継地となるシリア地域に対し商業活動を営んでいたのであり、また古アッシリア商人の行動に象徴されるようにアッシリア、バビロニア、アナトリア地域間の主要産物（銀、銅、

116) Podany (2002: 56)

117) Van Koppen (2004: 22-23)

118) Leemans (1960: 130-31), Birot (1962: 100-101)

羊毛、織物)の価格差を利用し、地域間の取引を繋げて利益を稼いでいた。その商業活動による粗資本利益率は100~200%にもなっていた¹¹⁹⁾。

バビロニアと北方ないし北西地域は、毛織物ならびに農産物の取引で繋がっていたが、とくにバビロニア産の毛織物は、膨大な生産力と人口を背景にして培われた織物と染色技術を継続させて、質量ともに優位性を確保していたと推定される。このような高品質の織物を産出する工房は、ウル第三王朝時代にすでに中央ならびに地方政権と密接に関係しており、古バビロニア時代でも国家所有の羊が牧人長を介して牧人たちに委託して飼育・管理されていた。納入された羊毛の一部は直接商人に委託して販売され、一部は工房に回されて製品化されて、高品質のものは外来品の調達のため中央政府によって管理され¹²⁰⁾、同じく商人により外国との取引の絡みで販売されて銀の収入確保が図られていた¹²¹⁾。羊毛に限らず、中央政府(王室)は王領地ならびに租税を通じて集積されるさまざまな産物を企業家ならびに商人に委託して銀による収入を確保し、それによって国内では調達できないさまざまな産物を、商人を通じて購入し確保していたのである。

この取引構造は当初に述べたようにメソポタミアでは不変であったのであり、支配権の拡張による周辺国から王宮への貢納という贈与関係のルートはあったけれども、恒常的な質量の確保という点では交易者(商人)を通じた調達は不可欠であった。メソポタミアの国家が持ち続けた統一への動機の一つは、周辺国に対する取引関係の継続性したがってそのための取引ルートの安全性や商人たちの身柄保全であったのであり、それらの国との通商条約の締結は不可欠のものであった。これらの点で、古バビロニア時代では国家と企業家、商人との関係は事業・販売委託という形で直接的経営形態から離れた、間接的であるがより洗練された相互依存関係になっており、国家財政はウル第三王朝期より以上に商人たち(商人共同体 *kārum*)そして彼らによって形成されるネットワーク(各都市に展開する商館、在外商館、植民地の間で結ばれる情報・販売網)に依存するようになっていた¹²²⁾。つまり、国家がその財政収入を確保するうえで、王

119) Kolinski (2010: 92), Lassen (2010: 170-74)

120) Veenhof (1972: 102)

121) Klengel (1978: 訳 147-49)

122) Stol (2004: 894-895)

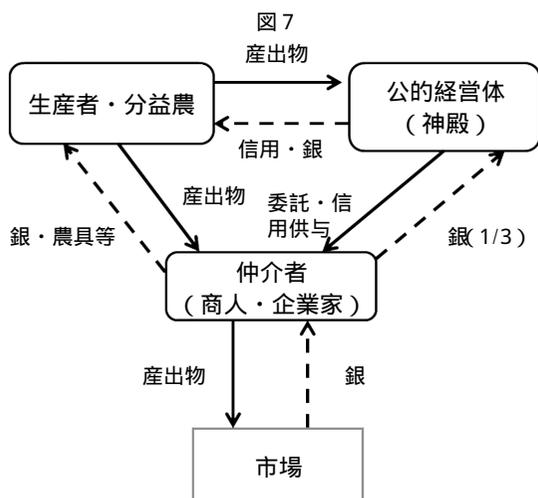
領地ならびに神殿領地の事業を企業家に依存するようになり，産出物と租税の製品の販売という点で商人たちに依存し，商人たちは販売活動がスムーズに行われるために商人（または商人共同体）間のネットワークを形成していた。それは最終消費者に結びついているという点で地域ならびに外国まで広がる市場システムがこの時代において存在していたことを意味している。市場システムは商人が活動するための信用供与の仕組みを整備させており，彼らのトラブルを調停する訴訟制度と商人ルールの確立を伴い，さらに取引に不可欠な貨幣（銀，ならびに大麦）を量的にも確保させていた。これら市場活動を支えるインフラが整備されて，ヒックスの提唱する「商人的経済」が古バビロニア時代には確かに成立していたのである¹²³⁾。

「王室事業」を中心にした古バビロニア時代の経済構造を，ミアロープ (Van De Meiroop 2002) に従って以下のように描写してみることにしよう。王室や神殿など公的経営体の下で従属していた，または委託されて生産活動を行っていた生産者（管理者，小作，農業労働者など）が本来は地代または租税として生産物を納入するのであるが，公的団体側は支出の便宜上銀による納入を必要としたため，企業家（商人）に産物の販売を委託し銀の納入を契約させる。生産者は生産物を企業家に手渡し，見返りに銀，物財や道具類を受け取る（または受け取りの契約を結ぶ）。彼らはその代金の一部を地代，租税として公的経営体に納入する。他方，企業家は生産物を市場で売却し，その代金を納入することにより公的経営体との契約を履行する。ただし，納付までの期間が公的経営体から要求されるまでとされることが多く，その間信用が供与された形になる。代金を手元にある間，企業家は貸し付けなどで収益を増やすことが可能になる。企業家や商人たちは私的な利益を追求して行動していたのである¹²⁴⁾。納付の要求が来ると，その代金を回収し，公的経営体からの仲介者（メッセンジャー）に支払われ，債務が履行されたことになる。ミアロープによれば，この公的経営体からの信用供与（企業家の信用買い）がその所有する自然資源の流通を促す役割を果たし，これなしでは委託業務はうまく機能しなかったであろうと主張する¹²⁵⁾。

123) Hicks (1969)

124) Powell (1977), Kolinski (2010: 92), Stol (2004: 896)

125) Van De Meiroop (2002: 166-67)



ところで、企業家つまり商人が、王室事業で魚、野菜、果実などの生鮮食料品を受け取り、販売を行っていたことがわかっている¹²⁶⁾。彼らは委託を受けてそれらを販売し、その代金を銀で王宮に納入しなければならなかった。保存加工を施したとしても、生鮮食品の販売は早急に行う必要があり、数量ともに大きなものであったであろうことから、それら物産を販売できるほどの市場が存在していたにちがいない。おそらく複数以上の都市で消費できるように商人間で物産が分配されたと考えられる。シッパルでは北方からの輸入品のなかには、にら、サフラン、無花果などが含まれており¹²⁷⁾、また公的経営体とは別の非団体メンバー（個人）間の交換の中には、果実、野菜類や魚などの割合が全体の24%ほどに達していた。日常的な活動の中に位置づけられるそれら非団体の取引活動は、穀物、油、果実・野菜、魚、羊毛、織物など日常生活に関わる物産に関わっており、またその内容は王室事業で商人たちに委託され販売されていた産品に驚くほど対応していた¹²⁸⁾。

ちなみに、古バビロニア時代では交換の媒体としては銀や大麦がより広く使用されており、とくに大麦は銀の不足を補う形で広範に日常生活の取引に使われていたと考えられている¹²⁹⁾。企業家や商人が扱った魚、野菜などの生鮮食

126) Stol (1982)

127) Stol (2004: 875)

128) Renger (1984: 103)

品が近隣の都市で販売されていたとすれば，神殿の供儀用に消費されるほかに，多くの消費者によって購入され消費されたと考えられる。公的経営体に属する従属者用に購入される場合は給付として従来通り大麦で支払われることがあったかもしれないし，都市の住民の場合は多くは報酬に対し銀建てだけでなく大麦など現物により支払われていたであろう。そのような場合，商人たちは物産の販売に対して銀と大麦の両建ての支払いに当面せざるを得なくなるわけで，そこから公的経営体への銀納付の資金をどのように工面するかという問題が生じることになる。つまり，先程あげた財・資金のフローの中の市場（その実態は商人・消費者間の販売・購入関係）は銀建ての市場だけでなく大麦建ての市場も含まれていたとみるべきであり，銀建ての販売代金をえるためには，両市場をむすびつけるもうひとつの資金フローがなければならなかった。これを簡単な構図で説明すれば，大麦の収入を得る集団が余剰分を銀に換えて，銀建ての商品を購入するか，逆に委託された物産の販売を大麦建てで行い，交換で得た大麦を大麦市場で銀に交換するような，銀と大麦の交換市場（銀建て大麦市場）があったということである。そして，その大麦市場に供給された大麦を銀で購入する別の集団が存在して，銀建て大麦市場のバランスがとられていたということでもある。ただし大麦と銀を交換するには，ある程度の数量の大麦が取引の俎上に乗る必要があるので，数量を集積して取引にまとめる流通上の仕組み，例えば大麦取引の仲介者が存在することにより，その交換市場は成立していたかもしれない¹³⁰⁾。

統一後のバビロン王国の資金循環を鳥瞰してみることにしよう。各地に点在する王領地からの産物と租税として納入された現物は回収されて，企業者，商人に委託されて各地域（都市）で販売される。その代金（ならびに一部の現物）が商人共同体を通じて首都のバビロンに集まってくる¹³¹⁾。ただし，産物の評価額（想定市価）の三分の一が固定納付分として集まり，残りの分は輸送，手数料などの費用と商人の利益分となって滞留する。一方，都市住民を主体とし

129) Kupper (1982), Powell (1996, 1999), Renger (1995)

130) Silver (2007: 103), Van De Mieroop (1997: 157)

131) アンミサドゥクァ勅令第 10 条には，王宮の余剰商品が商人たちにそれぞれの現地の市場価格で渡されることが記されており，各都市に市場（商館）が存在していたことに言及している。委託を受けた商品の金額はそれぞれ商人が活躍する都市の市場（商館）で評価されて，その売却が期待されていたということであろう。

た消費者層は何らかの形で収入をえて、現金化して必要な物資を購入している。ハンムラビ法典の各条文から窺えるように、都市住民(職人、労働者、サービス業者など)はかなりの程度日常で大麦と並行して銀による支払い、取引を行っていた。大麦を含めて産物を保管する倉庫業も私的に営まれており、いわば仲介者・流通業者に相当する私的業者も存在していた¹³²⁾。このことは、都市に特有の非農業部門に携わるひとびとが存在し、種々の販売網(市場)に接触して生計を立てていたことを推定させる。もちろん、郊外には農業その他の生産に携わる(王室、神殿の土地で従事している人々も含む)生産者が存在していた。都市と郊外において分業関係が成立していたわけで、この棲み分けによりすでに述べた王室事業、すなわち王室から委託された産物の販売はより容易になったであろう。委託された企業家と商人たちは、大麦決済部門とは別に銀決済部門が都市部に無視できないシェアを占めていたことを背景にして、委託契約で決められた銀納付を遂行することができたのである¹³³⁾。

それでは彼ら都市住民の銀収入はどこからきていたのか?もちろん、企業家、商人に関わる輸送業者は輸送費として収入を得ていたわけであるが、最終消費者である集団は、その収入をどこから得ていたのか? 職人、労働者、サービス業者ともに王宮や神殿に従属していた部分があるとしても(古巴ビロニア時代ではその従属度は部分的、金銭的なものになっていたのであるが)、奉仕部分以外に雇用による報酬部分があって、彼らはそこから現金(銀)を取得していた。つまり、王宮、神殿に吸収された資金の一部は再度バビロン、ならびに統治のため軍隊や官僚が住んでいた拠点都市から支出されたということである。少なくともこのような資金循環がなければ、国家は継続してその収入を銀によって

132) ハンムラビ法典第120~125条から、穀物を扱う倉庫業者や金銀など高価な財産を預ける信託業者の存在がうかがえる。業者は受託財産の保全義務を負うとともに、預かり期間中財産を運用(貸付)することも認められていた。これについては Klengel (1991: 226) 参照。

133) 都市の周辺地域から穀物が都市に集積され、王宮、神殿ならびに都市共同の倉庫に貯蔵されていたことが分かっており、集積、運搬には収集人や商人が介在しており、その管理は商人共同体の商人によってなされていたと推測されている (Breckwoldt 1995/1996: 78)。倉庫の穀物は配給や公共事業の支出などに使われ、残りは腐敗による損失を避けるために、有効に貸出などに使われ、倉庫は銀行と似た機能を果たしていたと考えられる。管理を委ねられた商人たちは、穀物の移動を口座開設により管理していたはずであり、銀と大麦の管理もその業務のなかに入ってくるわけで、いわば両替商のような役割を果たしていたと考えられ、銀と大麦の市場間取引はこのような商人を介在させて行われていたと推測される。

各地から確保することができなかつたはずである。すなわち，資金吸収のフローがあれば，必ず排出のフローが存在していなければならないということである。もちろん，その一部は国外からの物資購入に向けられていたはずである。しかしそれが国内の現金の枯渇を引き起こしていなかつたとすれば，国外流出分を埋め合わせる銀流入部分が依然としてあったことになる。ユーフラテス河上流部ないしシリア方面への交易が古バビロニア後期においてもみられ，活性化し続けていて，とくに毛織物，衣服等の輸出を通じて銀を獲得して続けたということであろう。もちろん，古バビロニア後期の王国の領土縮小が輸入超過を長期化させるものであったとしたら，国内の銀ストックの減少は避けられず，結果として国内外の商業活動の衰退をもたらしたかもしれない。

5. 新バビロニア時代の経済活動

最後に，古バビロニア時代から一千年後に成立した新バビロニア時代の経済について，M. ユルザ (Jursa 2006, 2010a, 2010b, 2014a) にしたがって簡単にふれてみることにしよう。彼によれば，新バビロニア王朝期ならびにペルシャ帝国初期（紀元前7世紀末から BC 484年）までの期間は「長い6世紀」として表現され，農業生産が増加し，市場志向が強まり，合わせるように都市における非農業部門の成長と，労働力の専門化と取引の貨幣化が進行し，全体として消費水準の上昇が見られた時期であった。この背景には，紀元前8世紀までに気候の変化が生じて湿潤化が始まり，それとともに河川流路の安定化がみられ，結果として農業生産上の環境が改善して，人口の増加と都市化を促したことがあげられる。また紀元前7世紀には新バビロニア王朝が成立し，メソポタミア地域の争乱が終結して，治安が大きく改善されたことも経済を活性化させる要因となった。

この時期の経済発展のパターンはユルザにより「商業化モデル」として表現されており，その経済発展の引き金は人口増加にあった。国家主導の土地や運河などへの投資とその顕示的な消費支出により人口増加と都市化が促進され，それが農産物への需要を促して，生産性の上昇と産物の特化をもたらすという正のフィードバック現象をもたらしたのであった。都市は消費センターとしての役割を果たし，その消費需要は地方から都市へ繋ぐ市場網を經由して生産者

に農業余剰をもたらし、「マルサスのわな」を乗り越えて高水準の生産と消費が実現し維持されていった。

産地となる都市周辺では国家によって支援された運河建設や土地の開墾などが進行し、耕地が拡大、流通網が整備されていった。平和の実現と国家の支援による灌漑システムの改善は農業投資の長期的トレンドを築くのに格好の条件となった。播種・休耕の期間短縮などの農業生産の集約化が進み、穀物の収穫量はそれ以前の時期に比べ25%も上昇した。二毛作への転化や園芸農業の優位性がたかまり、農業企業家の多くがナツメヤシ栽培を志向し、余剰が社会全般に拡大して、更なる生産性上昇へと導いた。農業生産は市場の影響を受けて多様化していったのである。

従属的労働者が帰属する「王宮(ならびに神殿)部門」においても、一見自給自足の経済を維持していたようにみられるが、実態は市場取引なしにはその経済を維持することは不可能になっていた¹³⁴⁾。神殿に代表される公的経営体の経済は、その領地で生産される生産物を市場で売却して貨幣収入を得、労働者の雇用(賃金支払い)や家畜の購入などのために貨幣を支出する必要があり、貨幣に依存した体制は不可逆なものになっていた。他方、その貨幣については紀元前8世紀までは銀がもっぱら高価格取引むけに使用され、比較的伝統的な交換パターンが維持されていた。しかし6世紀までには貨幣としての銀は高価格取引だけでなく、多くの取引において交換媒体として使用されるようになっていた。この背景には大量の銀の流通、インフレ進行による貨幣価値の低下、小額取引を維持する信用取引の補完的整備などがあげられるであろう。

さらに企業家による事業展開については、(ハルラーヌ *harrânu* と呼ばれる)パートナーシップの広範囲な応用が見逃せない。パートナーシップの形態については、投資家と事業家(エージェント)という片務的な関係があげられるが、それ以外にも投資家が事業者をかねたりする多様な双務的關係も存在していた¹³⁵⁾。パートナーシップにより形成される事業会社に相当する事業体は、固有の名義をもった形式的法人としては認識されなかったものの、その資産は投資家の資産とは区別されていた点で実質的な法人的組織を形成していたといわれる。債務関係についても、あるパートナーに対する債務を負った第三者がい

134) Jursa (2005)

135) Jursa (2010b: 56-58), Oelsner, Bruce and Wunsch (2003: 959-60)

た場合，その第三者は他のパートナーや会社全体に自動的に債務を負うわけではなかった。他方逆の場合，つまり事業会社のパートナーの誰かが商取引のために負った債務は会社のために生じたものであれば，他のパートナーを巻き込み負担義務を負った¹³⁶⁾。このようなパートナーシップ事業は，規模としては2人や3人で構成されることが多く，資産も中庸な規模であり，その制限下で企業家的な活動を行っていた。このため人数限定の私的事業会社が資金規模の大きな事業会社に発展する機会はかなりのところ排除されることになった¹³⁷⁾。この他に5世紀末（または4世紀初め）になると預金銀行業が発展し，預金業務が営まれるようになっていた¹³⁸⁾。

パートナーシップによる事業の分野は広く交易，農業，工芸などに及んでいた。交易事業，とくに長距離交易はハルラーヌ harrānu がもともとビジネス旅行を意味していることから，パートナーシップの原点となった事業であった。エジプト，イランからの奴隷，シリア，レバントからのワイン，レーズン，染料などがバビロニアへ輸入され，織物や農産物などが逆に輸出されていた。また近郊ないし都市間の交易では，都市部への農産物の供給，工芸品，外来品などの市場取引などに事業者がかかわり，結果バビロンはそれら事業による交易の中心地になっていた¹³⁹⁾。

農業については，大麦，ナツメヤシ，野菜などの農産物などの生産と販売，土地，従属労働者，奴隷のリース，農地・園芸地の耕作，牛，羊などの家畜飼育，牛，ロバの賃貸，農業労働者のリクルートなど多面的な事業に従事していた。さらに工房に関しては，織物など製造物・加工品の交易や鉄，その他金属，金細工，金物などの工房への投資や，ナツメヤシビールの醸造事業にも関与していた¹⁴⁰⁾。

136) Lanz (1976: 111-116), Jursa (2010b: 57)

137) Jursa (2010b: 59-62)

138) Jursa (2007: 158-61)

139) 交易経路ならびに商品については Graslin-Thome (2009: 183-284) を参照されたい。

140) Jursa (2005: 59-62, 2010a: 206-13) を参照。ハルラーヌ 事業と関った企業家として，イッデーン・マルデク Iddin-Marduk があげられる。彼は，大麦，ナツメヤシ，たまねぎなどの食料品を地代や運河料金徴収の請負を含めた種々の手段を使って，低価格で調達し，バビロンへ輸送して販売をして収益を得ていた。最初は資本のない小規模の事業として始め，パートナーシップ（ハルラーヌ）事業形式で投資家と組んで資金不足を埋め合わせていた。次第に事業が拡大し，20年間を経て自己資金を形成するまでに至り，事業組織を変え，代理

これら多面的な事業分野だけでなく、規模の点ではより大きな王室、神殿など公的団体の耕地、兵役奉仕などの目的で給付された給付地などを管理・運営していく請負業務などを含めて、都市居住の上流階層（神殿職を有し、神殿給付を得ている神官階層を中心とした中小の土地所有者層）により提供された資金を導入して、企業家クラスが実際の事業に従事し、利益を獲得、投資家に分配するという形態が多くなっていった¹⁴¹⁾。人口増と都市化、貨幣経済化を伴った経済

人を地方に派遣し、独占的に農家や官吏との間に契約のネットワークを張って自前で経営するようになった。Van De Mierop (1996: 207-10) 参照。さらに Iddin-Marduk については Wunch (1993) を参照。彼の事業は娘婿のエギピ家に継承されていったが、それ以前にエギピ家自体、同様の事業を同じくパートナーシップ（ハルラーヌ）で行っており、この婚姻によりマルデユクの事業（ノウ・ハウ、顧客、代理人・奴隷）を受け継いだのである。Wunch (2009: 238-39) を参照。ハルラーヌ事業については、他にシッパルやラルサの文書においても確認されており、神殿や国家との関わり（農地の経営管理、地代徴収）を持ちながら、交易事業も含めて事業を展開していた。ラルサのイッティ・シャマシュ・パラツ (Itti-Šamaš-balātu) もハルラーヌ事業に携わり、投資家、交易者、保証人として活躍していた。パートナーシップ事業は、イッデン・マルデユクと同じくネブカドネザル二世以後文書上途絶え、おそらく資金を蓄積してパートナーを必要としなくなったのではないかと推測されている。彼はまた王室領やイアンナ神殿から土地を借り受け、農業労働者を雇って耕作をし、利益を得ていたし、王室への奉仕義務を有する兵士や労働者に対し、土地を担保に信用も供与していた。後にはラルサのエバブバル神殿のため徴税請負も行っていた。このことから彼が国家や神殿の支持をえて事業活動を行っていたことは否定できない。Beaulieu (2000) 参照。さらにシッパル文書からも、多くの企業家の存在がうかがえ、彼らは一様に神殿と直接関係を持っていた（神職または僧禄を保有していた）。彼らは神殿の供儀や供物奉納の義務を果たす見返りに僧禄 (prebend) という所得を得ていたのであり、その義務遂行の副次的活動として種々の事業活動を行い、交易事業にはパートナーシップとしても参加していた。Bongenaar (2000) 参照。ほかにウルクにおいても神殿と地代徴収者との間に土地のリース契約があったことが確認され、彼らは神殿から家畜、犁、種籾を受け取って、一定量の農作物を納入する義務を負っていた。ウルクのケースについては Dandamaev (1991: 267-68) や Joannès (2000) を参照されたい。さらに地代、租税請負などの企業活動一般については Jursa (2010a: 193-206, 246-56) を参照されたい。

- 141) 新バビロニア時代からベルシャ帝国時代まで継続して貴族層、官僚高官などは土地経営管理をムラシュ家のような企業家に委ね、一定率の地代または租税を獲得していた。またその範囲は（弓兵、騎士、戦車集団など）封土受領者にも及び、彼らが軍事奉仕を実行せざるを得ないときに、必要な信用供与を行っていた。他に国家から水利権を請け負い、料金を徴収していた。それら土地、水利権を使って、企業の従属者や外部の使用者に他の農具や家畜などの生産道具も含めて貸し出しをして、生産物を獲得して売却などにより収入を得ていた。また、信用供与は私有地などを担保にすることにより、債務不履行の場合に実質的に土地を獲得する手段として使われていた。ムラシュ家については Van Driel (1989: 213) ならびに Stolper (1985, 1994) を参照されたい。

発展は，企業家クラスのみならず，物言わぬ保守的都市上流階層の増加によっても支えられていた。彼らの資金提供とそれから生まれる利益が，パートナーシップ事業の繁栄と都市部での旺盛な消費需要の一部を形成していたのである¹⁴²⁾。

人口増加と都市化によって進行した市場化と貨幣化の現象は，取引により価格が市場で形成されることを意味し，季節変動と需給要因により価格の変動が説明されるようになっていた。価格は紀元前 570～550 年では比較的安定したが，その後上昇を始め，530 年以降急騰し，510～500 年にピークを迎え，その後下落していった。550～510 年の間に 3 倍もの上昇があったとされる¹⁴³⁾。このような価格上昇は，539/8 年の新バビロニア滅亡，ペルシャ帝国へのバビロニア併合という政変があったとはいえ，高騰期が政変後 20 年ほど経たダリウス一世治世期に当たり，その原因はむしろ貨幣的要因にあったであろうとユルザは主張している。つまり，新バビロニアからペルシャ帝国初期にかけて，貨幣供給の著しい増加と市場経済・貨幣化の進展が全般的な物価上昇をもたらしたというわけである¹⁴⁴⁾。

市場経済の進展は生産物のみならず，生産要素（特に労働）においても市場の形成を促し，そこでは契約労働が一般化し，賃金交渉が行われて，賃金水準が需給要因にさらされるようになっていた。その背景には，多くの分野，例えば農業（小作），職人工房，強制賦役や兵役までが賃金労働者ならびに賦役を請け負う代用者を使用するようになっていたことがあげられる。土地所有関係においても，個人所有地においては土地売買が活発化し，企業家が私的にナツメヤシ栽培に投資，集約的農法により利益を稼ぐことが可能になっていた。また公的団体所有地であっても，短期的な契約更新を重ねた請負契約が交わされ，請負業者による農業経営が広範囲に見られるようになっていた。ただし，請負による農業経営は，すでに古バビロニア時代においても見られていたことは忘れてはならない。

このような経済発展が見られた「長い 6 世紀」時代にあって，その担い手が企業家と呼ばれる農業や交易の分野で積極的に投資を行った事業家であり，彼

142) Jursa (2005: 63, 2010a: 796-97).

143) Jursa (2010a: 781-83)

144) Jursa (2010a: 734-43, 782-83)

らの活発な活動により経済発展の成果が得られたといってもよいのであろうが、他方で彼ら企業家が活躍する舞台を用意した担い手として国家の存在があったことも見逃せない。国家の重要性については、まず王朝の成立により平和が実現したことがあげられる。次に国家がスポンサーになって運河ならびに土地開発・改善などに向けた大規模事業を行い、付随して国王が行った土地割当の枠組みが、都市周辺の荒蕪地や低利用地の開発への刺激になったことがあげられる¹⁴⁵⁾。この点で国王は新バビロニア農業の制度的、行政的、技術的基礎を形成する役目を果たしていた。そして王室・神殿経済と私的経済の間の仲介者として企業家的な活動を促したことにより、都市近郊ならびに都市間の交易網に対応した商業的活動の発展をもたらしたことがあげられ、取引に不可欠な貨幣の体系を整備し、銀の質保証を与えたことも見逃せない¹⁴⁶⁾。

特に重要な貢献は、大規模な建設事業による支出行為であり、広大な神殿、宮殿、都市城壁、防御施設などの構造物を建設していったことである。その資金はアッシリア制圧によって得られた収奪物や、シリア、レバントからの貢物などにより調達され、結果大量の銀塊が流通することになり、多くの都市未熟練労働者を長期間雇用させ、彼らに支払われた貨幣賃金でもって生活をできるようにした。彼らの支出は都市における消費需要を形成し、周辺の農業生産を刺激するようになった。また帝国の版図の拡大は富の中央への集積と拡散をもたらし、インフレーションの発生源であった。銀の価値は2千年紀の3分の一にまで下落し、初めて全目的の貨幣として機能する要因にもなった。さらに帝国内で課された租税や労役・兵役は実物で納付される代わりに貨幣で代納することが認められており、それが更なる貨幣化を促していったといわれる¹⁴⁷⁾。

このように「商業化モデル」で描かれた経済発展の構図は、人口増、土地開発、運河網の整備、ならびに消費需要に見合った生産物の特化と生産性の向上などといった総供給面の改善と、国家の建設事業によって生まれた建設関連物資の需要と労働者への賃金支払いによる派生的な消費需要、人口増から都市へ流入した都市住民の消費需要といった総需要の側面が好循環で相互に関連しあって展開していく姿を描いていた。そこではマクロ経済的な経済循環の体系が

145) 土地割当については Jursa (2010a: 321-22) を参照。

146) Jursa (2014a: 38-39)

147) Jursa (2010a: 779-80)

無意識に取り込まれており，アッシリアやシリアから得られた銀塊が大量の貨幣として国家事業による支出を通して供給され，それが帝国内の貨幣的取引の一般化という現象を通じて流通し，租税，貢物として政府へ還流し，その過程で帝国の経済が発展していくという構図が描かれていたのである。さらに付け加えると，「長い6世紀」で見られた経済発展は，前節で描かれた古バビロニア時代の経済の延長線にあり，市場化と貨幣経済化のさらなる発展を示していたのであり，一千年前と断絶する異質な展開ではなかったことも銘記しておかなければならない。

6. 結論

以上，各節の議論をまとめてみることにしたい。対象としてはウル第三王朝時代，古バビロニア時代，新バビロニア時代を扱ってきたわけであり，国家統治と経済システムの2つの側面からそれぞれの特性を描写してきた。その描写の中から時代固有の特性と時代を通じてみられる共通性の，いわば不連続と連続の二面性を見出すことができた。

ウル第三王朝時代は，J. レンゲルによれば，初期王朝期からの「オイコス(oikos)」経済が残存する世界であり，村落で展開される自家消費が主で，交換は限定的で互酬的性格の強い「家内(domestic)」生産様式と，王室や大神殿に支配され，労働専門化と物資の再分配で特徴づけられる「王宮/神殿」生産様式に支配された世界とされる¹⁴⁸⁾。しかし，これまでの多くの研究者の研究成果から窺えることは，家産制国家という枠組みながらも，その統治体制と経済システムは「オイコス」経済と単純に断定でいないほど複雑で巧妙なものであったことである¹⁴⁹⁾。

ウル第三王朝の統治形態は，初期王朝期から続く都市国家の体制（つまり都市国家としての自律性）を保持しながらも，知事（エンシ）の任命やバラ義務の

148) Renger (2005a, 2007), Liverani (2014)

149) ガーフィングルによればウル第三王朝をウェーバーが定義した家産制国家と位置付けるのは，王朝がなお地方権力と権威に依存している点で不正確であるとされる。Garfinkle (2008b)，古代メソポタミア経済への2部門モデルの適用については Jursa (2014a) を参照。さらにウル第三王朝経済の特徴については第3節ならびに Steinkeller (2004: 109-111), Garfinkle (2012: 137-40, 153) を参照。

賦課を通じて、また各所に配置した軍団基地を通じて政治的・軍事的に帝国を統治するという二重統治体制で特徴づけられる。この統治体制は当然経済システムに大きな枠組みを与え、各属州都市にバラ義務をローテーションにより賦課し、また周辺地域や帝国外の朝貢国地域から貢物(グンマダ、グン)を納めさせることにより、物資・労働力の集約を実現していたのである。これらは、祭祀やそのほか政府支出に使われ、また反対給付として属州都市に再分配されており、いわば統治機構に即した再分配経済が構築されていた。その再分配センターとしてプズリシュ・ダガン(現ドレヘム)が象徴的にあげられていたのである。

この帝国レベルの再分配システムは、初期王朝期以来の都市国家(属州都市)内部で原初的に成立していた再分配システムの展開とみてよく、そのシステムの下では属州都市内部の王宮・神殿部門に所属する従属者はそれぞれ生産物もしくは労働奉仕の割当を受け、それに対応して都市政府から土地または現物の給付を得ていた。奉仕と給付が制度的に一体化しており、例えばウンマでは都市政府の財務局の下に物資・労働力が会計上集約され、対応して従属者たちに身分と割当量に応じて土地や大麦などの給付が行われていたのである。ただし、この仕組みが順調に機能するには商人(dam-gār)と呼ばれた仲介者が必要であり、彼らは納入と給付に関わる物資の移動を直接管理し、時間上のミスマッチを調整する機能を果たしていた。また属州都市領域以外から物資を買い付け・調達する商業的役割も果たしていた。いわば、徴税、支払い、物資保管、運搬、そして貸付などの機能を果たし、政府の経済的機能を円滑化していた。さらには政府要人(高官や軍人)への貸し付けや給付地の作業請負など企業家としての側面も合わせ持っていた。彼らは形式上政府から給付を得る都市成員(エリン)としての地位をもちながらも、職業団体を形成して自律的な行動をとっており、不自由従属者ではなかった¹⁵⁰⁾。

経済システムの視点から見ると、割当/給付という再分配システムの財・サービスの移動が存在している一方で、属州都市の成員間で生活物資獲得のため交換活動が行われていたであろうと推測され、属州都市内に地域市場が形成されて、政府または神殿に関係した(「王宮/神殿」部門に対応する)再分配部門を補完するように全体の経済システムが作り上げられていた。

150) Steinkeller (2004: 98), Garfinkle (2012: 142-44)

ところで対外交易の場においては，メソポタミアを超えて中東地域全体で銀が交換媒体（秤量貨幣）として使用されてきた経緯があり，その交易の担い手が商人たちであった¹⁵¹。彼らは対外的なネットワークのみならず，上記のように属州都市内部さらには帝国全体の再分配部門まで仲介者として登場し行動しており，それらの経済運営を円滑にしていた。属州都市内部での再分配と交換（市場）の二重体制は，外延化してウル第三王朝全体にも拡大していた。ここでは銀が外部貨幣の枠を超えて属州都市内部にも入り込んでいたのである。他方で生活物資の交換には大麦やその他特定の生産物が交換媒体として使用されていた。大麦は内部貨幣として使用されていたと推測されるが，都市の間でそれぞれの高官たちが貸し付けを行っており，その決済手段に大麦が使用されていることから大麦は単純な局地的媒体でなかったといえる。

古バビロニア時代になると，都市国家という枠組みが弱体化し，一元を支配する領域国家が成立して傘下の都市を統治する体制が出来上がっていく。中央から支配者の代理人（総督）が派遣され，支配者は直轄地の拡大や神殿所領の支配などを通じて経済的権力を固めていった。また都市国家の枠組みが弱体化した分，その下層にある都市や村落の統治機構（市長，長老会議，市集会）を通じて租税の負担，労役の確保を促していった¹⁵²。結果 J. レンゲルによる「貢納 (tributary)」経済にバビロニアは変容していったとされる。都市の自律性の喪失は，その裏腹にさまざまな機会を通じ，公的地位にない私人へ業務を委託するという形で私人が活躍する舞台を用意し，王宮・神殿部門においても私人が重要度を増す世俗化・個別化の現象が顕著になっていった。その担い手がウル第三王朝時代でも登場していた企業家・商人たちであり，その活躍は古バビロニア時代において一層拡大していった。彼らは都市内部でも有力者としての地位を保持しながら，経済的実力を蓄積していったのであり，彼らが所属する商人共同体（カールム）は多くの主要都市で統治の代理機関として役割を果たしていった。古バビロニア時代の国家は，各主要都市の商人共同体を通じて経済的側面から広域支配を実現していったのであり，地域の商人または企業家たちは商人共同体を通じたネットワークに入って事業を実現せざるをえなかった。

151) メソポタミアの貨幣の変遷については Powell (1996) を参照。さらに「広義の貨幣」の視点から貨幣使用の境界と可能性を論じた Renger (2005b) も参照されたい。

152) Seri (2006)

他方で、彼らは蓄積した財力を使い、各層に貸し付けを行い、債務不履行時には担保となった土地を収用し、または債務者の労力を利用したりして、富の拡大を図っていった。結果、貧富の格差を拡大させ、国家の支持層となる農民たちの没落を招き、租税負担や兵員調達能力の低下を引き起こしてしまった。これがこの期に頻りに発布された徳政令(ミシャルム)の背景になったのである。

古バビロニア時代はバビロニアのハンムラビ王がメソポタミアを統一する以前の前期と以後の後期に分かれ、前期はとくに地域ごとに王国が分立し、競合しあう時期であった。その中で古アッシリアの中心都市アッシュールは、地理的位置から交易中継地という性格と支配層の権力が(国王、市集会、市役所に)分権化していたという政治的環境の中で、アナトリアとの通商関係を継続的に構築することにより、国家内で出資者と事業者というパートナーシップ(naruqqum contracts)を形成して、商業活動を活発化させるという極めて興味深い事例を作り上げていた¹⁵³⁾。パートナーシップによる商業活動を活性化させるために、アナトリアなど現地の商館(カールム)を介して外交・通商活動を行ってアッシリア商人の取引の円滑化とその保護を図り、さらに商法・民法上の諸規則ならびに裁判制度を自律的に整備して現地とアッシュール間の商業活動を円滑化させる工夫をしていた。商人たちの活動は現地との交渉と地域間の価格差を利用した利益確保に基づいたものであり、条約に基づいて決められた管理交易ではなかった。現地の支配者が求めたのは交易品の一部の先買または輸入税による収益の一部供出であったのであり、商業活動の内容には直接関係していなかった。逆にアッシリア側ではアッシリア商人の保護と取引の独占を要求していたのである¹⁵⁴⁾。

新バビロニア時代になると、貨幣化と都市化が一層進行するようになった。自然環境と政治的環境の好転が生産力を増大させ、それが人口増加と都市への人口集中の基盤を形成したためである。貨幣化については、さまざまな階層と機会において銀の使用が普遍化していったことを意味し、公共団体(神殿)内の給付ならびに支払いについても貨幣(銀)を使用する比率が高まっていった¹⁵⁵⁾。一方で公共事業を中心にした政府支出とそこから派生する事業で雇用

153) Veenhof (2010)

154) Veenhof and Eidem (2008: 201-18)

された，または都市内のさまざまな職種で雇用された都市住民の所得形成（貨幣取得）は，物資の購買能力を高め，応じて生活物資や嗜好品を供給する事業に投資する誘因を高めることになった。またメソポタミアにおいて不可欠な対外交易は一貫して投資を促す事業形態であった。それらに關与する事業者と出資者（これは都市内部の神殿の上位職者が多く占めている）とのパートナーシップ（ハルラーヌ）が多様な組み合わせをもって成立し，事業への投資を促して市場への供給を増やして取引を活発化させた。その結果バビロニア全土を統合する市場が形成されるに至ったかと問われれば，輸送費用やほかの取引費用を考慮すると，その実現はなかなか困難であったと答えざるを得ないかもしれない¹⁵⁵⁾。しかし，少なくとも企業者・商人たちの事業投資は，対費用との関係から採算が合う限り，実行されて利益を獲得していた可能性が高く，この時代それだけの自由度が商人たちにはあったことはいえるであろう。

以上の要約から導かれた共通の特性とはなんであったろうか。3つの時代から得られた共通事項は，国家の支配形態が変容しながらも，経済的側面において商人（または企業者）と呼ばれる自律的な仲介機能を果たす存在が一貫してみられたことである。国家の再分配システムは，依然としてその性格から時代を通じ保持されてきた部分である。しかるにバビロニア全体を覆う広域の帝国経営において，再分配システムが包括的に機能していくことは最初から困難であった。そもそも，その構成要素である都市国家（属州都市）レベルでもその完全な再分配経済の運営は困難であったのである。経済運営を円滑に遂行するにはシステムの各所で発生する財・サービスの需要と供給のギャップを調整する商人の存在が不可欠であったのであり，国家の運営者はそのミスマッチを埋めるために彼らに依存せざるを得なかった。

他方，多くの構成員にとって再分配による給付は生活を維持するうえでは不十分であった。何よりも生産者としての彼らは，国家への割当・奉仕においてパートタイマーであって，せいぜい年間の半分の時間を割いているだけであり，残りの時間は自身のために行動せざるを得なかった。つまり，奉仕以外の時間では生活を維持するうえで生産，販売，交換を自力で行わなければならなかつ

155) Jursa (2005)

156) しかし，Jursa (2014c) によれば「長い6世紀」において市場の効率性と統合化は進んだとされる。

た。再分配部門とは別に、属州都市の成員たちは自家消費できない分の物資をえるため、交換(市場)を通じて必要な財を得ていたのであり、その結果再分配部門と共存して交換(市場)部門が形成されていた。そして再分配部門ではミスマッチの調整を、市場部門では市場へのアクセスという仲介者の機能を商人は果たしており、いわば両部門を繋ぐ媒体として存在していたのである¹⁵⁷⁾。

ウル第三王朝時代から古バビロニア時代、そして新バビロニア時代という時代の変遷にもかかわらず、このような再分配部門と市場部門の共存性、ならびに両者をつなげる仲介者(商人、企業者)の存在は、一貫してみられた現象であったことを認めざるを得ない。他方、この連続性に対して、時代を通じ変化していた点を取り上げるならば、貨幣の使用される領域(市場部門)が拡大し、より広い分野にわたってひとつとが市場取引に関与するようになったことがあげられる¹⁵⁸⁾。その要因として、王宮・神殿部門と呼ばれている再分配経済の中核部門でさえ、関与する人々が委託・請負の形で、さらには貨幣による支払い・給付という形で市場経済の領域に深く関わっていったこと、また都市部を中心にした低所得階層において貨幣を媒介にして所得を得る機会が拡大したことがあげられ、経済全体の市場取引のウエイトを拡大させてきたのである。

ここで再度銘記しなければならないことは、市場の領域拡大は国家によって編成された再分配領域の拡大と軌を一にしていたということである。自然発生的な交換現象とは別に、国家の枠組みの中で制度化された割当・奉仕/給付の

157) Van De Mieroop (2004). さらに公的経営体に属さない個人レベルでの交換については、J. レンゲル(Renger 1984)が古バビロニア時代の書簡から選出し(約300通)、その内容を整理して非団体的交換の特徴を紹介している。その多く(抽出された品目の約8割)は食料品(穀物、油、飲料、果実、魚など)や羊毛・衣服などで占められ、頻度の点から相当量の交換(3か月~1年分の配給相当)が個人間で行われており、書簡で残す必要があるほどの分量であったと推量される。書簡の多くは支払い手段が明示されていなかったが、明示されていた品目だけをとりあげると書簡で大半を占めた品目と重なっており、銀との対価で購入され、一部は大麦で交換されていた。交換の多くは市場という特定の場所を通してではなく、親類、知人、事業パートナーなどの個人を媒介して行われていた。レンゲルは、書簡の中には互酬的なニュアンスをもつものがあることを指摘し、書簡の書き手は、市場が不在または存在しても選択の余地が限られた環境にあっただろうとも推測している。それにもかかわらず、とりあげられた対象品目の多くが、銀や大麦その他との交換に購入されていた品目と重なるという事実は、逆に非団体の(家内生産様式にあるとされた)個人の間でも支払い手段(銀、大麦、その他)を通じて交換がかなりの程度行われていたと推測させる余地があることを示唆している。

158) Jursa (2014a)

体系を補完するように市場の領域（つまり継続的に発生する交換の領域）は形成されてきたことであり，経済循環の体系から見れば，両者は循環を完結させる相補的な部分を構成していたことである。両者を結合し媒介する担い手が商人または企業家と呼ばれた人々であったのである。このようにメソポタミアの古代経済の変遷を総括すると，市場と商人とのダイナミックな関係を再認識せざるを得なくなる。メソポタミアの経験は，国家統治に関わる形で再分配領域を認識させると同時に，市場の形成と発展の文脈の中で商人の役割を認識させるものであったのである。

ここで改めて市場と商人の関係について考えておかなければならないであろう。古代経済については，K. ポランニーが社会の統合形態の3様式（互酬，再分配，交換）の枠組みの中で市場の起源についてふれていた。彼は交換の領域においても交易，貨幣，市場にそれぞれ別の起源をもち，概念上別存在として分けなければならないと主張していた。市場はその中でもっとも新しいものであるとして古代経済では起源上周辺的な位置にあると主張したのである。ポランニーによれば，市場とは何より交換の場所を表し，また需要と供給に応じた価格形成メカニズム（自動調整メカニズム）を表していた¹⁵⁹。後者は経済学ではなじみのある概念であるが，それとは別に制度的視点から市場は「市場諸要素と呼ぶ制度的特徴の連合体」と定義していた¹⁶⁰。市場諸要素とは，場所，供給者，需要者，慣習，法，等価体系などを表しており，これら諸要素の下に交換の状況が制度的に作り出されたものが市場であった。発生論的には，市場諸要素があって，それらが制度的に組み合わさって需要・供給 価格メカニズムが形成され，価格形成市場が出現することになる。その発生要因としては，外的要因と内的要因があげられ，前者では外部からの財獲得により対外市場が生まれて，後者では地域内で食糧分配の必要性から（アゴラなどで代表される）地域市場がうまれていた¹⁶¹。

ポランニーの独自性は，市場と交易とは別の歴史と論理を持っており，古代経済では交易がより一般的であって，市場はむしろ限定的で目新しいものであるとそれぞれを位置づけたところにあった。交易には贈与交易，管理（または

159) Polanyi (1977: 訳 229)

160) Polanyi (1977: 訳 231)

161) Polanyi (1977: 訳 232)

条約) 交易, そして市場交易があるが, 古代社会では管理交易の形態が一般的であって「市場メカニズムと交易の結合は, 非常に特殊な発達形態であった」としたのである¹⁶²⁾。ポランニーにあっては, 固定的な等価性に特徴づけられた管理交易は, 再分配経済とうまく結合するものであり, そこで活躍する交易者 (tamkârum) は市場取引とは無縁の仲買人という存在であったのである¹⁶³⁾。

そこで, 改めて管理された交易と市場の違いを確認する必要がある。前者が再分配経済とうまく結合するのは, 再分配という財・サービス集積と消費というルールに基づいた流れに沿ったものであり, そこに関与する交易者も含めた従事者はそのルールに従って行動しなければならない。そこには義務による遂行があり, 対応した報酬(給付)があつて, 個別の局面での行動の自由は極めて制限されている。対して, 市場は交換の機会ごとに交渉がなされ, 相手同士で同意のもとで交換の内容がきめられるような, 継続的な(制度化された)交換の場である。結果, 交換される財, 数量, 交換比率(価格)が決まってくるが, 継続的な取引は関わってくる環境が大きく変化しない限り, 継続的な内容になり, 慣習化していく。価格が妥当な相場という形で安定化するということは不思議なことではない¹⁶⁴⁾。もちろん, この場合暗黙の同意の下での安定化であつて, (天候不順や争乱など)環境が大きく変化すれば価格は変化し, 高騰することも珍しくない。しかし, 正常時には妥当な(公正と思われる)価格が継続し慣習化する。市場においても(不完全市場であれば)価格が先行して慣習的に提示されることはありえる。取引の環境が継続的で大きな変化がない状況であれば, 管理交易か市場かの判断は限られた証拠の下でははなはだ困難になるであろう。もちろん, 需要・供給の条件が変化するような状況では, 市場で価格が変化することは排除できない¹⁶⁵⁾。

60年代初頭までの考古学的資料と研究成果によって, ポランニーは古代メ

162) Polanyi (1977: 訳 250)

163) Polanyi (1977: 訳 168-70)

164) Widell (2005) は, 王宮・神殿部門からの給付(大麦)を受ける人々による大麦供給とそれを必要とする独立主体の需要が不変であるため, 地方市場での交換価値はある範囲内に収まるとのべている。この点についてはさらに Van De Mieroop (2004) を参照。

165) 因みに再分配部門が優勢と考えられていたウル第三王朝経済にあつてさえ, 交易対象物の過半数は非等価性(多価値)であり, 銀価値換算でみた場合, 資本財に限定した場合と同様, 圧倒的に非等価性が占めていた。Snell (1991)

ソポタミアにおいて市場は存在せず，交易は非市場的な管理交易であると主張していた¹⁶⁶⁾。しかし，その後の粘土板資料の発掘と解読，それらに応じた研究成果によりポランニーの根拠は崩されてきている¹⁶⁷⁾。古アッシリアの商人は明らかに利潤動機が大きく働いた商人であり，受動的な仲買人ではなかった¹⁶⁸⁾。同時代にあった古パピロニアの商人たちも利潤動機が働いていなかったと断定するのは難しいであろう¹⁶⁹⁾。ウル第三王朝時代にさかのぼっても，その商人たち (dam-gàr) は身分動機に基づく仲買人の性格を十分持っていたと判断しうる¹⁷⁰⁾。しかし，そのような状況にあって彼らは取り巻く環境を巧妙に利用して貸し付けや請負耕作などを通じて富を蓄積していた。利潤動機が欠落していたとは断定できないであろう。身分という枠組みの中でも利潤動機を持った商人ないし企業家が存在しうることを古代メソポタミア社会で認めることはけっして的外れではない。

本稿の冒頭でもふれたように，ポランニーとは別に市場の生成と商人の関係を正面から扱った経済学者に J. ヒックスがいる。彼は『経済史の理論』のなかで「慣習経済」と「指令経済」の狭間の中で商人が交換の領域を作り出していく状況を取りあげ，商人たちが共同体をつくり商人的国家ならびに植民地を形成して商人的 (mercantile) 経済 = 市場経済の領域を拡大していく過程を描いていった¹⁷¹⁾。市場の発展は制度的に他の経済領域の仲介者である商人が互いに集合して拡大していく過程であり，市場取引の円滑化を図るため種々の制度（貨幣，法，制裁，信用，銀行など）を発展させていき，最終的には市場経済（商人的経済）の範囲がほかの経済に浸透し拡大していくというシナリオを提示したのである。そしてそのダイナミックな過程には一貫して利潤動機が働いていたのである。

市場の領域が商人的経済と重なり，商人の役割をクローズアップさせ，慣習ならびに指令経済の境界部分にあって当初は周辺的な位置にあった点，さらには地中海地域のギリシャ人都市やフェニキア人都市の展開を念頭にあったかも

166) Polanyi (1957, 1963)

167) Powell (1999)

168) Veenhof (1972: 348-51)

169) Adams (2009: §6.13), Goddeeris (2002: 392-96)

170) Polanyi (1977: 訳 164-65)

171) Hicks (1969)

しれないが、商人的国家とその植民地のネットワークの中で市場経済の拡大の様子を具体化した点で、ヒックスの考えは古代メソポタミアの世界とよく合致するものであった。商人が集団で与える制度的進化のダイナミズムは、ポランニーが述べた市場諸要素の連合体としての市場の生成・発展の内実をちょうど埋めるものであったのである。

しかしながら、ヒックスにおいても第一局面(古代)における商人的経済の描写は、その外部にある経済との接点に集中し、対外交易の担い手としての存在に絞られがちであった。古代メソポタミアで垣間見られたのは、再分配部門に入り込んだ商人・企業家の存在であった。再分配部門の成長と変容は、内部に市場部門を成長させ、商人たちはその成長に大きく関与していたのであり、対外交易の点からのみ商人の活動範囲を限定させるものではなかった。むしろ再分配部門が国家統治の拡大とともに変化していくと同時に、市場部門は同調する形で、対外交易と共に国内の商業ネットワークをより深化・拡大させていったといつてよい。商人的経済の拡大と指令経済の変容・進化の同時的プロセスを見落としてはならない。

K. ポランニーが自動調整システムとしての市場の起源を求め、ヘレニズム時代の東地中海における穀物の世界市場に辿りついた時、その発生はナウクラティスのクレオメネスにより再編成されたエジプトの穀物輸出体制の確立に負っていたのであり、アレクサンダー大王死後にあってもエジプトが優れて再分配(指令)経済にあつて大量の穀物集積が可能であったことから世界穀物市場が成立しえたと彼は論じていた¹⁷²⁾。奇しくも市場経済の発展と再分配経済体制の変化の関係性を読み取る鍵がそこに存在していたと思われるのである。

参考文献

- Adams, R. McC. (1981), *Heartland of Cities: Surveys of Ancient Settlement and Land Use on the Central Floodplain of the Euphrates*, Chicago.
- Adams, R. McC. (2006), "Shepherds at Umma in the Third Dynasty of Ur: Interlocutors with a World beyond the Scribal Field of Ordered Vision", *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 49: 133-69.
- Adams, R. McC. (2008), "An Interdisciplinary Overview of a Mesopotamian City and its Hinterlands," *Cuneiform Digital Library Journal* 2008: 1,

172) Polanyi (1977: 訳 432-38)

- http://cdli.ucla.edu/pubs/cdlj/2008/cdlj2008_001.html.
- Adams, R. McC. (2009), "Old Babylonian Urban Notables," *Cuneiform Digital Library Journal* 2009: 7, http://cdli.ucla.edu/pubs/cdlj/2009/cdlj2009_007.html.
- Adams, R. McC. (2010), "Slavery and Freedom in the Third Dynasty of Ur: Implications of the Garshana Archives," *Cuneiform Digital Library Journal* 2010: 2, http://www.cdli.ucla.edu/pubs/cdlj/2010/cdlj2010_002.html.
- Algaze, G. (2008), *Ancient Mesopotamia at the Dawn of Civilization: The Evolution of an Urban Landscape*, University of Chicago Press.
- Armstrong, J.A., S.W. Cole and V.G. Gurzadyan (1998), *Dating the Fall of Babylon: A Reappraisal of Second Millennium Chronology*, Mesopotamian History and Environment Series 2, Memoirs 4, the Oriental Institute, Chicago.
- Barjamovic, C. (2011), *A Historical Geography of Anatolia in the Old Assyrian Colony Period*, Museum Tusulanum Press and CNI Publications.
- Beaulieu, P.-A. (2000), "A Finger in Every Pie: The Institutional Connections of a Family of Entrepreneurs in Neo-Babylonian Larsa," in A.C.V.M. Bongenaar, ed., (2000): 43-72.
- Bongenaar, A.C.V.M. ed., (2000), *Interdependency of Institutions and Private Entrepreneurs*, MOS STUDIES 2, Proceedings of the second MOS symposium, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut.
- Bongenaar, A.C.V.M. (2000), "Private Archives in Neo-Babylonian Sippar and their Institutional Connection," in A.C.V.M. Bongenaar, ed., (2000): 73-94.
- Breckwoldt, T. (1995/1996), "Management of Grain Storage in Old Babylonian Larsa," *Archiv für Orientforschung* 42/43: 64-88.
- Charpin, D. (1982), "Marchands du palais et marchands du temple à la fin de la 1^{ère} dynastie de Babylone," *Journal Asiatique* 270: 25-65.
- Dandamaev, M.A. (1991), "Neo-Babylonian Society and Economy," in J. Boardman, I.E.S. Edwards, N.G.L. Hammond, E. Sollberger and C.B.F. Walker, eds., *The Cambridge Ancient History, 2nd Edition, Vol. 3, Part 2: The Assyrian and Babylonian Empires and other States of the Near East, from the eighth to the Sixth Centuries B.C.*, Cambridge University Press: 252-75.
- Dercksen, J. G. (1999), "On the Financing of Old Assyrian Merchants," in J. G. Dercksen, ed., *Trade and Finance in Ancient Mesopotamia*, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut: 85-99.
- Dercksen, J. G. (2000), "Institutional and Private in the Old Assyrian Period," in A. C. V. M. Bongenaar, ed., *Interdependency of Institutions and Private Entrepreneurs*, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut: 135-152.
- Dercksen, J. G. (2004), *Old Assyrian Institutions*, Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten.
- Eilers, W. (1931), *Gesellschaftsformen im altbabylonischen Recht*, Verlag von Theodor Weicher in Leipzig.
- Fagan, B. (2004), *The Long Summer: How Climate Changed Civilization*, Basic Books (東郷えりか訳, 『古代文明と気候大変動 人類の運命を変えた二万年史』河出書房新社, 2005).
- Farber, H. (1978), "A Price and Wage Study for Northern Babylonia during the Old Babylonian Period," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 21: 1-51.

- Fisher, D. A., R. M. Koerner, D. Raynaud, V. Lipenkov, K. K. Andersen, T. Blunier, S. O. Rasmussen, J. P. Steffensen, and A. M. Svensson. (2009). "Holocene Thinning of the Greenland Ice Sheet". *Nature* 461: 385-388; doi: 10.1038/nature08355.
- Garfinkle, S. (2004), "Shepherds, Merchants, and Credit: Some Observations on Lending Practices in Ur III Mesopotamia," *Journal of Economic and Social History of the Orient* 47: 1-30.
- Garfinkle, S. (2008a), "Silver and Gold: Merchants and the Economy of the Ur III State," in P. Michalowski, ed., *On the Third Dynasty of Ur: Studies in Honor of Marcel Sigrist*, American Schools of Oriental Research: 63-70.
- Garfinkle, S. (2008b), "Was the Ur III State Bureaucratic? Partrimonialism and Bureaucracy in the Ur III Period," in S. Garfinkle and J. Johnson, eds., *The Growth of an Early State in Mesopotamia: Studies in Ur III Administration*, Consejo Superior de Investigaciones Científicas: 55-61.
- Garfinkle, S. (2012), *Entrepreneurs and Enterprise in Early Mesopotamia: A Study of Three Archives from the Third Dynasty of Ur (2112-2004BCE)*, CDL Press.
- Gasche, H. (1989), *La Babylonie au 17e siècle avant notre ère: approche archéologique, problèmes et perspectives*, E.Burger-Heinrich, University of Ghent.
- Goddeeris, A. (2002), *Economy and Society in Northern Babylonia in the Early Old Babylonian Period (ca. 2000-1800)*, Peeters.
- Graslin-Thome, L. (2009), *Les échanges à longue distance en Mésopotamie au 1er millénaire. Une approche économique*. De Boccard.
- Harris, R. (1975), *Ancient Sippar: A Demographic Study of an Old-Babylonian City (1894-1595B.C.)*, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut.
- Heimpel, W. (2009), *Workers and Construction Work at Garshana*, CUSAS 5. CDL. Press.
- Hicks, J. (1969), *A Theory of Economic History*, Oxford University Press. (新保博, 渡辺文夫訳 『経済史の理論』講談社学術文庫, 1995)
- Huijs, J., R. Pirngruber and B. van Leeuwen (2014), "Climate, War and Economic Development: The Case of Second-Century BC Babylon," in R. J. Van der Spek, J. L. van Zanden and B. van Leeuwen, eds., *A History of Market Performance: From Ancient Babylonia to the Modern World (Routledge Explorations in Economic History)*, Routledge: 128-48.
- Hunger, H. and R. Pruzsinszky, eds. (2004), *Mesopotamian Dark Age Revisited*, Proceedings of an International Conferences of SCIAM.
- Joannès, F. (2000), "Relations entre intérêts privés et biens des sanctuaires à l'époque néo-babylonienne," in A.C.V.M. Bongenaar, ed., (2000): 25-42.
- Jursa, M. (2005), "Money-Based Exchange and Redistribution: the Transformation of the Institutional Economy in First Millennium Babylonia," in Ph. Clancier, et al. eds., *Autour de Polanyi: Vocabulaires, théories et modalités des échanges*, De Boccard: 171-86.
- Jursa, M. (2006), "Agricultural Management, Tax Farming and Banking: Aspects of Entrepreneurial Activity in Babylonia in the Late Achaemenid and Hellenistic Periods," in Briant, P. and F. Joannès, eds., *La transition entre l'Empire achéménide et les royaumes hellénistiques*, De Boccard: 137-222.
- Jursa, M. (2007), "The Transition of Babylonia from the Neo-Babylonian Empire to Achaemenid Rule," *Proceedings of British Academy* 136: 73-94.

- Jursa, M. (2010a), *Aspects of the Economic History of Babylonia in the First Millennium BC: Economic Geography, Economic Mentalities, Agriculture, the Use of Money and the Problem of Economic Growth*. With contributions by J. Hackl, B. Janković, K. Kleber, E.E. Payne, C. Waerzeggers, and M. Weszeli. AOAT 377, Ugarit-Verlag.
- Jursa, M. (2010b), “Business Companies in Babylonia in the First Millennium BC: Structure, Economic Strategies, Social Setting,” in M. Wissa, ed., *The Knowledge Economy and Technological Capabilities: Egypt, the Near East and the Mediterranean Second Millennium V.C. – First Millennium A.D. Proceedings of a Conference Held at the Maison de la Chimie Paris, France 9-10 December 2005*. Aula Orientalis Supplementa 26, Aula Orientalis.
- Jursa, M. (2014a), “Babylonia in the First Millennium BCE-Economic Growth in Times of Empire,” in L. Neal and J. G. Williamson, eds., *The Cambridge History of Capitalism vol. 1: The Rise of Capitalism; From Ancient Origins to 1848*, Cambridge University Press: 24-42.
- Jursa, M. (2014b), “Factor Markets in Babylonia from the Late Seventh to Fourth Century BC,” *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 57: 173-202.
- Jursa, M. (2014c), “Market Efficiency and Market Integration in Babylonia in the ‘Long Sixth Century’ BC,” in R. J. Van der Spek, J. L. van Zanden and B. van Leeuwen, eds., *A History of Market Performance: From Ancient Babylonia to the Modern World (Routledge Explorations in Economic History)*, Routledge: 83-106.
- Klengel, H. (1978), *Hammurapi von Babylon und seine Zeit*, VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften. (江上波夫，五味亮訳『古代バビロニアの歴史：ハンムラビ王とその社会』山川出版社，1980)
- Klengel, H. (1983), *Handel and Händler im alten Orient*, Kuehler und Amelang, (江上波夫・五味亨訳『古代オリエント商人の世界』山川出版社，1983)。
- Klengel, H. (1991), *König Hammurapi und der Alltag Babylons*, Artemis & Winkler.
- Kolínski, R. (2010), “Between City and Markets: Mesopotamian Traders of the 2nd Millennium BC,” in L. Kogan, ed., *City Administration in the Ancient Near East*, Babel und Bibel 4: 81-94.
- Kraus, F. R. (1976), “Felpachtverträge aus der Zeit der III. Dynastie von Ur,” *Die Welt des Orients* 8: 185-205.
- Kraus, F. R. (1982), “kārum’, ein Organ städtischer Selbstverwaltung der altbabylonischen Zeit,” in *Les pouvoirs locaux en Mésopotamie et dans les régions adjacentes*, Brill: 29-42.
- Kupper, J. R. (1982), “L’usage de l’argent à Mari,” in G. Driel, Th. J.H. Van Krispijn, M. Stol, K. R. Veenhof, eds., *Zikir šumim; Assyriological Studies Presented to F.R. Kraus on the Occasion of his Seventieth Birthday*, Inst. Des Hautes Études de Belgique: 163-72.
- Lanz, H. (1976), *Die Neubabylonischen harrānu-Geschäftsunternehmen*, J. Schweitzer Verlag.
- Larsen, M. T. (1976), *The Old Assyrian City-State and its Colonies*, Akad. Forlag.
- Larsen, M. T. (1977), “Partnerships in Old Assyrian Trade,” *Iraq* 39: 119-46.
- Lassen, A. W. (2010), “The Trade in Wool in Old Assyrian Anatolia,” *Jaarbericht Ex Oriente Lux* 42: 159-79.
- Leemans, W. F. (1950), *The Old Babylonian Merchant: His Business and His Social Position*, Brill.

- Leemans, W. F. (1954), *Legal and Economic Records from the Kingdom of Larsa*, Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten.
- Leemans, W. F. (1960), *Foreign Trade in the Old Babylonian Period as Revealed by Texts from Southern Mesopotamia*, Brill Archive.
- Liverani, M. (2014), *The Ancient Near East: History, Society and Economy*, Routledge.
- Maeda T. (1992), "The Defense Zone during the Rule of the Ur III Dynasty," *Acta Sumerologica (ASJ)* 14: 135-72.
- Maekawa, K. (1987), "Collective Labor Service in Girsu-Lagash. The Pre-Sargonic and Ur III Periods," in Powell, M. ed., *Labor in the Ancient Near East*, American Oriental Society: 49-71.
- Maekawa, K. (1988), "New Texts on the Collective Labor Service of the Erín-People of Ur III Girsu," *Acta Sumerologica (ASJ)* 10: 37-94.
- Michel, C. (1996), "Le commerce dans les textes de Mari," *Amurru* 1: 385-426.
- Oelsner, J, Bruce, W. and C. Wunsch (2003), "Mesopotamia: Neo-Babylonian Period," in R. Westbrook, ed., *A History of Ancient Near Eastern Law*, Handbook of Oriental Studies, Section One, vol. 72/1, Brill: 911-74.
- Oppenheim, A. L. (1954), "The Seafaring Merchants of Ur," *Journal of the American Oriental Society* 74: 6-17.
- Podany, A. H. (2002), *The Land of Hana: Kings, Chronology, and Scribal Tradition*, CDL Press.
- Polanyi, K. (1957), "Marketless Trading in Hammurabis' Time," in *Trade and Market in the Early Empires*, K. Polanyi, C.M.Arensberg and H.W. Pearson, eds., Free Press and Falcon's Wing Press: 12-26. (「ハムラビ時代の非市場交易」玉野井芳郎・平野健一郎訳『経済の文明史』日本経済新聞社, 1975)
- Polanyi, K. (1963), "Ports of Trade in Early Societies," *The Journal of Economic History* 23: 30-45. (「原初的社會における交易港」玉野井芳郎・栗本慎一郎訳『人間の經濟 交易・貨幣および市場の出現』補論一)
- Polanyi, K. (1977), *The Livelihood of Man*, H. W. Pearson, ed., Academic Press. (玉野井芳郎・中野忠訳『人間の經濟 市場社會の虚構性, 交易・貨幣および市場の出現』岩波書店, 1980)
- Postgate, J. N. (1992), *Early Mesopotamia. Society and Economy at the Dawn of History*, Routledge.
- Powell, M. A. (1990), "Identification and Interpretation of Long Term Price Fluctuations in Babylonia: More on the History of Money in Mesopotamia," *Altorientalische Forschungen* 17: 76-99.
- Powell, M. A. (1996), "Money in Mesopotamia," *Journal of Economic and Social History of the Orient* 39: 224-42.
- Powell, M. A. (1999), "Wir müssen unsere Nische nutzen: Moneies, Motives, and Methods in Babylonian Economies," in J. G. Dercksen, ed., *Trade and Finance in Ancient Mesopotamia*, MOS studies 1, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut: 5-24.
- Rede, M. (2005), "Le <Commerce sans marché à l'époque d'Hamm-rabi> réévaluation d'une thèse polanyienne a partir d'une étude de cas," in Ph. Clancier et al., ed., *Autour de Polanyi: Vocabulaires, théories et modalités des échanges*, De Boccard: 135-54.

- Renger, J. (1984), "Patterns of Non-Institutional and Non-Commercial Exchange in Ancient Mesopotamia at the Beginning of the Second Millennium B.C.," in A. Archi, ed., *Circulation of Goods in Non-Palatial Context in the Ancient Near East*, 31-123.
- Renger, J. (1990), "Different Economic Spheres in the Urban Economy of Ancient Mesopotamia. Traditional solidarity, Redistribution and Market Elements as the Means of Access to the Necessities of Life," in E. Aerts and H. Klengel, eds., *The Town as Regional Economic Centre in the Ancient Near East*, Proceedings of Tenth International Economic History Congress, Leuven: 20-28.
- Renger, J. (1994), "On Economic Structures of Ancient Mesopotamia," *Orientalia* 63: 157-208.
- Renger, J. (1995), "Institutional, Communal, and Individual Ownership or Possession of Arable Land in Ancient Mesopotamia from the End of the Fourth to the End of the First Millennium B.C.," *Chicago-Kent Law Review* 71: 269-319.
- Renger, J. (2005a), "K. Polanyi and the Economy of Ancient Mesopotamia," in Ph. Clancier et al., ed., *Autour de Polanyi; Vocabulaires, théories et modalités des échanges*, De Boccard: 45-65.
- Renger, J. (2005b), "Subsistenzproduktion und redistributive Palastwirtschaft: Wo bleibt die Nische für das Geld? Grenzen und Möglichkeiten für die Verwendung von Geld im alten Mesopotamien," in W. Schelkle und M. Nitsch, eds., *Rätsel Geld. Annäherungen aus ökonomischer, soziologischer und historischer Sicht*, Marburg: 271-324.
- Renger, J. (2007), "Economy of Ancient Mesopotamia: A General Outline," in G. Leick, ed., *The Babylonian World*, Routledge: 187-97.
- Richardson, S. (2007), "The World of Babylonian Countrysides," in L. Gwendolyn, ed., *The Babylonian World*, Routledge: 13-38.
- Roaf, M. (1990), *Cultural Atlas of Mesopotamia and the Ancient Near East*, Equinox.
- Robson, E. (2008), *Mathematics in Ancient Iraq: A Social History*, Princeton University Press.
- Seri, A. (2006), *Local Power in Babylonian Mesopotamia*, Equinox.
- Sharlach T. M. (2004). *Provincial Taxation and the Ur III State*, Brill • Styx.
- Silver, M. (1995), *Economic Structures of Antiquity*, Greenwood Publishing Group.
- Silver, M. (2007), "Redistribution and Markets in the Economy of Ancient Mesopotamia: Updating Polanyi," *Antiquo Oriente* 5: 89-112.
- Skaist, A. (1994), *The Old Babylonian Loan Contract*, Bar-Ilan University Press.
- Snell, D. (1991), "Marketless Trade in Our Time," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 34: 129-41.
- Steinkeller, P. (1991), "The Administrative and Economic Organization of the Ur III State," in McG. Gibson and R. Biggs, eds., *The Organization Power: Aspects of Bureaucracy in the Ancient Near East*, 2nd Edition, the Oriental Institute of the University of Chicago: 15-33.
- Steinkeller, P. (2002), "Money-Lending Practices in Ur III Babylonia: The Issue of Economic Motivation," in Hudson M. and M. van de Mierop, eds., *Debt and Economic Renewal in the Ancient Near East*, CDL Press: 109-35
- Steinkeller, P. (2004), "Toward a Definition of Private Economic Activity in Third Millennium Babylonia," in R. Rollinger and C. Ulf, eds., *Commerce and Monetary Systems in the Ancient World: Means of Transmission and Cultural Interaction*, Melammu Symposia V, Franz Steiner Verlag: 91-111.

- Stol, M. (1982), "State and Private Business in the Land of Larsa," *Journal of Cuneiform Studies* 34: 127-230.
- Stol, M. (2004), "Wirtschaft und Gesellschaft in Altbabylonischen Zeit", in D. Charpin, D. Edzard, M. Stol, *Die Altbabylonische Zeit*, Academic Press, Vandenhoeck & Ruprecht.
- Stolper, M. (1985), *Entrepreneurs and Empire: The Murašû Archive, the Murašû Firm, and Persian Rule in Babylonia*, PIHANS 54.
- Stolper, M. (1994), "Mesopotamia, 482-330 B.C.," in D.M. Lewis, J. Boardman, S. Hornblower and M. Ostwald, eds., *The Cambridge Ancient History vol. 6: The Fourth Century BC*, Cambridge University Press: 234-60.
- Stone, E. (1977), "Economic Crisis and Social Upheaval in Old Babylonian Nippur," in L. Levine and T. Young Jr. eds., *Mountains and Lowlands: Essays in the Archaeology of Greater Mesopotamia*, Udena Publications: 267-89.
- Van De Mieroop, M. (1992), *Society and Enterprise in Old Babylonian Ur*, Dietrich Reimer Verlag.
- Van De Mieroop, M. (1997), *The Ancient Mesopotamian City*, Oxford University Press.
- Van De Mieroop, M. (2002), "Credit as a Facilitator of Exchange in Old Babylonian Mesopotamia," in M. Hudson and M. Van de Mieroop, eds., *Debt and Economic Renewal in the Ancient Near East*, Bethesda: 163-73.
- Van De Mieroop, M. (2004), "Economic Theories and the Ancient Near East," in R. Rollinger and C. Ulf, eds., *Commerce and Monetary Systems in the Ancient World: Means of Transmission and Cultural Interaction*, Melammu Symposia V, Franz Steiner Verlag: 54-64.
- Van Driel, G. (1989), "The Murašûs in Context," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 32: 203-229.
- Van Driel, G. (2000), "Institutional and Non-Institutional Economy in Ancient Mesopotamia," in A. Bongenaar, ed., *Interdependency of Institutions and Private Entrepreneurs*, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut: 5-23.
- Van Driel, G. (2002), *Elusive Silver: In Search of a Role for a Market in an Agrarian Environment Aspects of Mesopotamian Society*, Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten.
- Van Koppen, F. (2004), "The Geography of the Slave Trade and Northern Mesopotamia in the Late Old Babylonian Period," in H. Hunger and R. Pruzsinszky, eds., *Mesopotamian Dark Age Revisited*, Proceedings of an International Conference of SCIAM: 9-33.
- Van Koppen, F. (2007), "Aspects of Society and Economy in the Later Old Babylonian Period," in G. Leick, ed., *The Babylonian World*, Routledge: 210-223.
- Veenhof, K. R. (1972), *Aspects of Old Assyrian Trade and its Terminology*, Brill.
- Veenhof, K. R. (1985), "Observations on Old Assyrian Memorandums," *Jaarbericht Ex Oriente Lux* 28: 10-23.
- Veenhof, K. R. (1991), "Private Summons and Arbitration among the Old Assyrian Traders," *Bulletin of the Middle Eastern Culture Center in Japan* 5: 437-59.
- Veenhof, K. R. (1997), "'Modern' Features in Old Assyrian Trade," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 40: 336-66.
- Veenhof, K. R. (2003), "Old Assyrian Period," in R. Westbrook, ed., *A History of Ancient Near Eastern Law*, Handbook of Oriental Studies, Section One, vol. 72/1, Brill: 431-83.

- Veenhof, K. (2010), "Ancient Assur: The City, its Traders, and its Commercial Network," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 53: 39-82.
- Veenhof, K. and Eidem (2008), *Mesopotamia: The Old Assyrian Period*, Saint-Paul.
- Vinther, B. M., S. L. Buchardt, H.B. Clausen, D. Dahl-Jensen, S. J. Johnsen, D. A. Fisher, R. M. Koerner, D. Raynaud, V. Lipenkov, K. K. Andersen, T. Blunier, S. O. Rasmussen, J. P. Steffensen, and A. M. Svensson (2009), "Holocene Thinning of the Greenland Ice Sheet," *Nature* 461: 385-388.
- Waetzoldt, H. (1978), "Zu den Feldpachtverträgen aus Nippur," *Die Welt des Orients* 9: 201-205.
- Widell, M. (2005), "Some Reflections as Babylonian Exchange during the End of the Third Millennium," *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 48: 358-400?
- Wilcke, C. (2008), "Der Kauf von Gütern durch den "staatlichen" Haushalt der Provinz Umma zur Zeit der III. Dynastie von Ur: Ein Beitrag zu "Markt und Arbeit" im Alten Orient am Ende des 3. Jahrtausends vor Christus," in P. Michalowski, ed., *On the Third Dynasty of Ur: Studies in Honor of Marcel Sogrist*, American Schools of Oriental Research: 261-85.
- Wunch, C. (1993), *Die Urkunden des babylonisches Geschäftsmannes Iddin-Marduk, Zum Handel mit Naturalien im 6. Jahrhundert, v. chr., vol.I and II*, Gronnigen.
- Wunch, C. (2000), "Neobabylonische Geschäftleute und ihre Beziehungen zu Palast- und Tempelverwaltungen: Das Beispiel des Familie Egibi," in A.C.V.M. Bongenaar, ed., (2000): 95-118.
- Wunch, C. (2009), "The Egibi Family," in L. Gwendolyn, ed., *The Babylonian World*, Routledge: 236-47.
- 明石茂生 (2002), 「国家の形成：空間的視点からの考察」『成城大学経済研究』156: 201-78 .
- 明石茂生 (2005), 「気候変動と文明の崩壊」『成城大学経済研究』169: 37-87 .
- 大貫良夫, 前川和也, 渡辺和子, 屋形禎亮 (1998), 『人類の起源と古代オリエント』中央公論社。
- 川崎康司 (2000), 「古バビロニア期交易における国際市場としてのエシュヌナ王国の役割 中継地エシュヌナと経由した交易品について 」『オリエント』43-2: 15-29 .
- 木原徳子 (2006), 「トークンからみたウルク・エクспанション」『西アジア考古学』7: 61-81 .
- 小泉龍人 (2001), 『都市誕生の考古学』同成社 .
- 田中裕介 (2007), 「シュメール初期王朝時代における都市国家ラガシュの軍事制度」『西南アジア研究』66: 1-16 .
- 常木晃 (1995), 「交換、貯蔵と物資管理システム」常木晃, 松本健編 『文明の原点を探る 新石器時代の西アジア』同成社: 146-67 .
- 前川和也 (2005), 「シュメールにおける都市国家と領域国家 耕地と水路の管理をめくって 」前川和也・岡村秀典編 『国家形成の比較研究』学生社: 160-78 .
- 前田徹 (1990) 「ウル第三王朝時代の Gú-na ma-da」『オリエント』33-1: 80-95 .
- 前田徹 (1994) 「シャギナ (将軍) 職の成立 シュメール統一王権の確立に関連させて 」『史観』130: 62-73 .
- 前田徹 (1995) 「シュメール王権の展開と家産制」『オリエント』38-2: 121-35 .
- 前田徹 (2003) 『メソポタミアの王・神・世界観：シュメール人の王権観』山川出版社 .

* 本稿は成城大学経済研究所第1研究プロジェクト(市場と統治 経済システムの長期的変動に関する歴史分析)の研究成果の一部である。

(あかし・しげお 成城大学経済学部教授)